

南京大虐殺犠牲者国家追悼読本 (コンサイス版)

『南京大虐殺犠牲者国家追悼読本』編集委員会 編

12・13



南京出版メディアグループ
南京出版社

南京大虐殺犠牲者国家追悼読本 (コンサイス版)

『南京大虐殺犠牲者国家追悼読本』編集委員会 編

12-13

南京出版メディアグループ
南京出版社



編集委員会

主 任 沈 健

副主任 吳曉茅 朱成山

編集委員

廬海鳴 朱衛國 朱同芳

劉 莅 張 生 張利明

學術顧問

朱成山 孫宅巍 張憲文

協力者

馬 斌 艾德林 左 坤

朱天樂 朱建明 嚴必友

汪國培 沈麗國 陸 靜

周 鵬 樊立文 戴興海

本書の編集委員会

學術指導

魯 潔 張連紅 王衛星 齊春風

編集委員

王 兵 艾德林 楊伝兵
余 維 郭蜀寧 邵長峰
金 波 宰兆勤 王必門

日本語訳

汪麗影 紀文心 彭 曦

法定国家追悼日

国家追悼日の制定

2014年2月27日、第12回全国人民代表大会常務委員会第7回会議において、12月13日を南京大虐殺犠牲者追悼日とする決議が採択された。毎年の12月13日に、国家が南京大虐殺の犠牲者および日本の中国に対する侵略戦争期間中に犠牲になった人々を追悼する。

はじめての国家追悼式

2014年12月13日、中国共産党中央委員会、全国人民代表大会、国務院、全国政治協商会議、中央軍事委員会が南京において、南京大虐殺犠牲者国家追悼式典を開催し、中国共産党中央委員会総書記、国家主席、中央軍事委員会主席である習近平氏は重要な談話を発表した。

はじめに

南京は中国 4 大古都の一つである。南京では、60 万年前に人類が生存していた遺跡が発見され、2500 年近くの都市史のなか、約 450 年間は都であった。「六朝古都」「十朝都会」などの呼び名があり、中華文明の重要な発祥地の 1 つである。

1937 年 12 月 13 日から、旧日本軍は南京において 6 週間の長きにわたって中国人に対して大虐殺を行い、内外を驚かせる南京大虐殺事件を起こし、古い歴史を持つこの町に大きな災難をもたらした。

歴史を銘記し、世界に中国人の人権と人類文明に対する態度、中国人の平和に対する熱愛、そして平和を維持する決心を表明するために、2014 年 2 月、第 12 回全国人民代表大会常務委員会第 7 回会議において、12 月 13 日を南京大虐殺犠牲者国家追悼日にする決議を採択した。これにより、毎年 12 月 13 日に国家追悼式が行われることになる。

南京大虐殺犠牲者国家追悼日の活動に備えて、南京市教育局、南京大虐殺犠牲者記念館、南京出版メディアグループは関係の専門家、教師の協力を得て、この『南京大虐殺犠牲者国家追悼読本』シリーズを編集した。読本は小中学校生の閲読および学習に使うことになっている。

本書は陥落前の南京、南京防衛戦、南京大虐殺、救援と暴露、歴史的裁判、記憶と国家追悼の六つの部分からなっている。本書の目的は歴史事実を概略紹介して、学習者の歴史認識を深めてもらうことである。それぞれの部分には、導入、本文、史実リンクのセッションがある。時間順に内容を配列し、学習者が「点」と「線」の結合を通して、歴史事実を踏まえて歴史変遷のプロセスへの理解を深めてもらう。

目次

一 陥落前の南京

歴史文化名城…………… 1

近代的都市へ…………… 4

二 南京防衛戦

日本軍の南京攻略…………… 8

中国軍の南京防衛…………… 12

三 南京大虐殺

内外を震撼させた大虐殺…………… 17

大規模な女性暴行…………… 23

強奪、放火…………… 27

四 救援と暴露

人道的救援…………… 32

日本軍の暴行を暴露…………… 39

五 歴史的裁判

東京裁判…………… 45

南京裁判…………… 49

六 記憶と国家追悼

歴史的記憶…………… 54

国家追悼…………… 59



一 陥落前の南京

歴史文化名城

導入

1930年代、朱自清が『南京』という随筆にこう表現している。「南京を歩くとき、まるで博物館に入ったような錯覚におちいる。至る所に名所旧跡があり、触れたり感じたりしてもよし、悠然と想像に任せてもよし」と。では、南京の歴史を簡単に振り返ってみよう。

古い都

南京の東の郊外にある湯山の葫芦洞から出土した猿人の頭蓋骨は、今から6万年前、南京にはすでに古代人類が住んでいたことを示している。考古学資料によると、今から約6000年前の新石器時代、南京城内の北陰陽營には原始村落が現れたのである。戦国時代、越の国王勾践が呉の国を滅ぼした後、紀元前472年に、今の中華門があるところの南西側に、「越城」を築き、南京建城の歴史を開いた。これは今より約2500年前のことである。

南京、嘗て金陵、秣陵、建業、建鄴、建康、白下、江寧、蔣州、昇州、上元、集兪、応天、天京等と呼ばれ、古くから「江南麗しき地あり、金陵帝王の州」という美名を持っており、中国歴史上最も古い都城の一つとして、北京、西安、洛陽とともに「中国4大古都」と称されている。

紀元229年、魏、蜀、呉、三国のなかで、呉の皇帝孫権は、南京に都を築き、建業と名づけた。東呉以降、東晋、南朝の宋、齊、梁、陳は南京に都を置き、歴史上「六朝」と呼ばれる。六朝以降の1000

王朝・政権	年代
東呉	229-280
東晋	317-420
南朝・宋	420-479
南朝・齊	479-502
南朝・梁	502-557
南朝・陳	557-589
南唐	937-976
明（初代）	1368-1421
太平天国	1853-1864
中華民国	1912-1949

余年間、五代十国時期の南唐及び明朝初期、太平天国、中華民国は、いずれもここに都を設けた。それゆえ、南京は「十朝の都」として名を馳せている。

文化名城

南京は、深い文化伝統と思想流派の伝承に恵まれ、六朝以来、続々と文化的巨匠を生み出してきた。刘勰、孔尚任、吴敬梓、曹雪芹、袁枚、魏源などはその例である。数多くの名作もここで誕生したのである。例えば、『昭明文選』『文心雕龍』、『永樂大典』、『儒林外史』、『紅樓夢』、『海国図志』が挙げられる。南京の文化的地位が高く、多くの名所旧跡がある。例えば、明孝陵、明城壁、夫子廟、玄武湖、莫愁湖、鶏鳴寺、南朝陵墓石彫、白鷺洲、鼓楼などである。これら有名な建築、名所旧跡は、南京城の古い歴史文化を表すだけでなく、かつて南京という町がいか



夫子廟



秦淮河

秦淮河はまた淮水、竜蔵浦、小江と呼ばれ、南京の母なる河と言っても言い過ぎではない。源流は溧水区の東廬山と句容市の宝華山にあり、江寧区の方山付近で合流した後、西北へと南京城を流れている。南京城内にあるのは秦淮河で、東水関から流入し、西水関から城を出て、合わせて5 kmで、「十里の秦淮」と一般に呼ばれ、内秦淮とも称される。内秦淮兩岸は、六朝から旧家と町人の集まる地であり、商売人にせよ、文人にせよ、皆ここに集まり、儒学が非常に盛んであった。

南京明城壁

南京の明代城壁は、中国古代の軍事防御施設で、城壁建築技術の集大成である。明の太祖朱元璋が南京に都を置いてから、南京城壁が建造され、それが南京の象徴ともなっている。1366年に建造を開始し、21年の長きを経てようやく築かれてきたものである。南京明城壁は、宮城、皇城、京城、外郭という4重の構造からなっており、なかでも京城城壁の長さは34kmに達し、高さは14～21mである。朝陽門、正陽門、通済門、聚宝門、三山門、石城門、清涼門、定淮門、儀鳳門、鐘阜門、金川門、神策門、太平門という13の城門を持つ。外郭城壁の長さは60kmで、麒麟門、仙鶴門、姚坊門、観音門、仏寧門、上元門、滄波門、高橋門、上方門、夾門、双橋門、柵欄門、鳳台門、大安徳門、小安徳門、大馴象門、小馴象門、江東門という18の城門を持つ。一般には「内十三、外十八」と呼ばれている。



玄武湖近くの明代城壁

近代的都市へ

導入

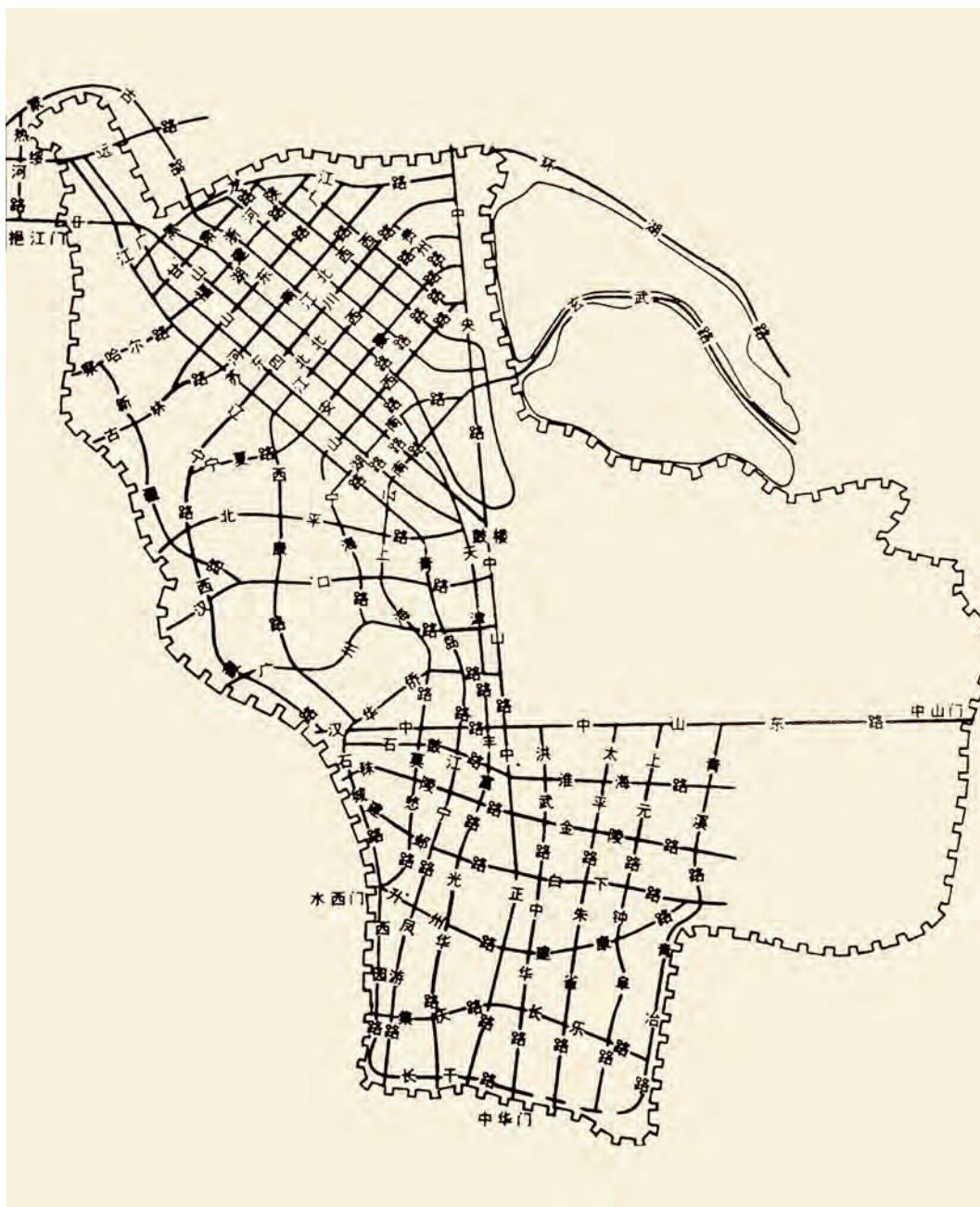
1937年11月末、南京で取材していたドイツ人新聞記者ウォルフソンは、南京のことについて次のように書いた。「（1920年代から1930年代の）南京は単なる首都ではなく、中国の新しい制度、最先端のものの代名詞ともなっている。（中略）道路橋梁鉄道などの建設、（中略）南京の商業、交通、農業、工業が空前の繁栄期に入っていた。」

都市建設

1912年1月1日、孫中山(孫文)は南京で中華民国の成立を宣言し、中華民国臨時大統領に就任した。南京は中国の共和制誕生地である。1927年、中華民国の首都は南京に決められた後、首都の地位と機能の向上が図られ、人口の急増と庁舎の拡大に応じるべく、都市のインフラ整備が推進された。

1928年、孫中山の柩が北平から中山陵に移されるが、それに先立ち、南京城内に大道り(中山大道)が築かれた。大道は西北の下関から始まり、東の中山門に至る。全長は12kmで、幅は40mである。中山大道の設計は将来を見据えたもので、人口の急増による都市の交通渋滞を防いだけでなく、高い緑化率、広い道幅、整然とした配置で全国にその名を馳せている。

1929年末に公布された『首都計画』では機能によって南京を6つの地区に分けた。即ち中山門外の紫金山南麓は中央政治区、鼓楼・傅厚崗一带は市級行政区、揚子江両岸は工業区、主な道路および大行宮・新街口は商業区、そして、鼓楼・五台山は文教区、山西路一带は新しい住宅区である。



首都南京の道路網（1931年作成）

経済の発展

都市建設の推進と人口の急増とともに、商業は賑わうようになった。最初にできたのは城南夫子廟、太平路、中華路商業区で、店舗が集中し、品物も備わっており、商売は盛んに行われ、人々は次から次へと往来し跡を絶たない。その後、南京では、中央商場、交通銀行、聚興誠銀行、郵政貯金滙業局、大華大劇院、新都大劇院、福昌飯店などを中心とする新街口商業区ができ、「中国最大の購買消費圏」と呼ばれていた。

戦前から南京で働いてきたドイツ人ジョン・ラーベは日記でこう記した。「太平路は本来南京の主な商業街で、南京市民の誇りと言っても良い。この街の輝かしいネオンは上海の南京路に劣らない。」



永利鉾工場（部分）

戦争直前、南京の工業も大きな発展を遂げてきた。当時、全国の工業界をリードする永利鉾工場があるだけでなく、長い歴史を持つ機械工業企業である浦鎮工場、軍工企業である金陵兵工場及び中国セメント工場もあった。

1927年から1937年にかけての10年間の建設を経て、1937年南京占領に至るまでに、南京は既に近代的な都市の様相を現わすようになってきたのである。

人口の変化

1927年以降、南京は当時の政治、軍事、文化の中心地となり、軍政機構、科学研究所、学校、

社会团体や商業施設などが急ペースで増加した。外国大使館や諸政府機関は相次いで南京へ移され、各種全国規模の会議はほぼ南京で開催された。南京を訪れる外国人はますます増え、都市の人口も急増してきた。1937年6月、南京の人口は既に100万人を突破し、人口密集の繁華都市に変貌した。

南京が占領される前の人口構成は3つの部分からなっていた。1つは常住人口、2つ目は外来流動人口、3つ目は南京城を防衛する兵隊である。常住人口は約50万人。外来流動人口は数万人にのぼり、主に上海、無錫、蘇州などの占領区から避難してきた難民である。南京駐在の兵隊は主に首都に配置された軍隊、第2次上海事変の後、上海から転送されてきた負傷兵、また上海陥落後新たに編成された南京守備軍を合わせて13の師団、15の旅団の約10万人余りである。



1930年代の南京水西門

史実にリンク

中央商場

中央商場は1936年に創設された民間投資の株式会社である。当時、商場は場所をテナント化し、店主に経営を任せる形を取り、その巨大な規模と整った施設は、北平、上海、浙江、福建、広東の各地の商人を引き寄せた。景德鎮陶磁器、湖南湘繡、杭州張小泉鉄、また中国珠宝、皖南茶などの品々は人々の目を驚かせた。中央商場は当時南京における最初で最大の商場だけではなく、アジア、極東地域で最大で影響力が最も大きい企業の一つである。

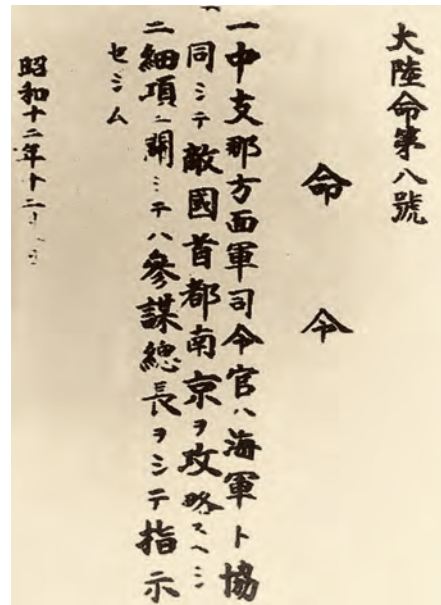
二、南京防衛戦

日本軍の南京侵攻

導入

1937年12月1日、日本大本営は中支方面軍司令官松井石根に対して「海軍と協同して敵国首都南京を攻略すべし」との命令を下した。

明治維新以後、日本は徐々に軍国主義の道进行るようになった。1930年代、日本は中国侵略のペースを加速させた。1931年9月18日、日本軍は瀋陽柳条湖で爆破事件を起こし、日中戦争の幕を開けた。1937年7月7日、日本は北平の盧溝橋で事件を起こし、全面的侵略を開始した。同年8月13日、第2次上海事変が勃発し、日本側は松井石根を司令官に任命し、上海派遣軍を編成し、上海への侵攻を始めた。3ヶ月間にも及ぶ上海事変の中で、日本軍は中国軍民の堅固な抵抗に遭遇し、損失は大きかった。「3ヶ月で中国を滅亡」の計略は実現できなかったが、中国軍も大きな死傷の代価を払わされた。1937年11月12日、上海は占領され、上海事変は終わった。その後日本軍は進路を西へ向け、南京を侵攻し始めた。



大本営が松井石根に下した南京攻略命令

侵攻の決定

1936年8月、日本軍参謀本部は1937年の対華作戦計画を秘密裏に策定した時、2つの軍団の兵力で「南京作戦に向けて、上海、杭州、南京の三角地帯の占領と確保を実現させる」と計画した。松井は南京侵攻の主な推進者である。

上海占領の後、松井石根は南京への迅速な侵攻を積極的に建言した。その目的は、中国政府に政治的な圧力をかけ、中国の精鋭部隊を城下で包囲し殲滅させるためである。彼は日本軍参謀本部

への報告書に「中国の首都たる南京占領の意義がとても大きい」と繰り返し強調し、そのため、「現在の兵力で大きな犠牲を払っても惜しまない」との覚悟を決めていた。しかし、参謀本部に「せいぜい2ヶ月以内で目的を必ず達成する」と豪語した。

1937年11月28日、松井は日本軍参謀本部から南京進攻の命令を受けて、その心情を日記にこう記した。「次長の電報により、参謀本部の南京侵攻の命令が伝えられた。ここ数日間の努力の甲斐があって非常に嬉しい。両軍は後方との連絡がようやく取れるようになり、こうして、命令が下された以上、早くとも来月5日両軍は後方との連絡がようやく取れるようになり南京侵攻の指令を出せる」。と。

1937年12月1日、日本軍大本営は一つの師団を上海に駐留させた。中支方面軍所轄の上海派遣軍と第10軍のその他の兵力は司令官の松井石根によって率いられ、海軍と協力して南京を攻め始めた。その後、中支方面軍の各部隊は幾つかの進路に分けて南京へ向かい始めた。

南京進撃

蘇南地区は最初に日本軍の猛攻にさらされた。当時、中国政府は首都南京を守るため、蘇南地区に呉福、錫澄という2つの防衛線を築いたが、種々の原因によって、この2つの防衛線はあまり役に立たなかった。11月19日、蘇州、常熟が陥落した。中国軍は錫澄線から撤退し、数回にわたって日本軍と正面衝突をした。11月27日、無錫は日本軍に占領された。無錫を攻めた日本軍の各師団は、京沪鉄道、江南大運河、太湖及び太湖北岸を北上して中国軍を追撃し、29日に常州を占領した。同時に、浙江省長興、湖州一帯を占領した日本軍は、28日宜興を占領した。12月2日、日本軍は江陰を占領し、12月9日鎮江を陥れた。

錫澄最北の要塞たる江陰を攻めるため、日本軍は1つの旅団を錫澄公路、2つの歩兵連隊を常澄道路に沿ってするように配置した。当時、江陰駐留の中国軍には、約2つの歩兵師団があり、日本軍と猛烈な戦いを展開し、陣地を失っても数回にわたって応戦した。日中両方の損失も大きなものがあった。12月



日本軍南京攻略戦経路略図

1日以降、戦況は過熱化した。日本軍は絶対優勢を有する制空権、海軍力、近代装備を後ろ盾に、江陰の各砲台及び通信施設を攻撃した。死傷者多数という劣勢のもとで、中国軍はやむなく撤退することに決めた。

蘇南、浙北、皖東などの地方が相次いで陥れられ、首都の南京は外圍の障壁を失い、日本の強力な軍勢の脅威に晒されてしまった。

沿路暴行

日本軍は南京を進撃するなか、至るところで虐殺、強姦、略奪、放火をくりかえし、このため、江南地方の民衆は悲惨な境地に立たされた。

蘇州は古くから「魚や米の郷」、「シルクの府」、「地上の楽園」と呼ばれており、その経済資源と文化財は以前から日本に狙われていた。上海事変が始まってから、蘇州はすでに日本軍の侵攻と占領の重要目標となっていた。1937年8月から11月にかけての蘇州占領の時期に、日本軍はここで一連の略奪と暴行をくりかえし、民衆に巨大な災難と損失をもたらした。

当時、蘇州閶門外の朱家荘に住んでいる劉璐蘭はわずか5歳にもかかわらず、外で遊んでいたところ、日本軍戦闘機の轟音を耳にした。何が起こったかまだ分からないうちに爆弾は続々と投下され、家屋が倒れ、煙が立ち昇り、周りは火の海になり、街には負傷して倒れた民衆で一杯だった。爆弾の破片が飛んできて彼女の腕は二つに切断され、皮だけで肩に繋がっていた。血が止まらない彼女は意識を失い、博習病院（現在蘇州大学付属第一病院）に運ばれ、応急手当を受けた。意識を取り戻したものの、左の腕を永遠に失ってしまった。



日本軍の爆撃で左腕を失った
わずか5歳の蘇州幼女 劉璐蘭



炎上する江陰城

常熟を占領した後、日本軍は市の中心部だけで家屋3万軒余りを焼き払い、平民を3000人余り殺害し、婦人を374人強姦した。無錫を占領した後、日本軍は城内で大規模な略奪、強姦、放火を行った。閭口から呉橋までだけで、2000人余りの平民が殺害された。江陰占領後、日本軍は半月にわたって放火し続け、家屋を1000軒余り焼き払い、平民を1000人以上殺害した。

史実にリンク

南京大虐殺の主犯 松井石根

松井石根（1878～1948年）は日本陸軍大将で、南京大虐殺の現地の最高責任者である。1937年第2次上海事変の後、59歳の松井石根は日本軍上海侵攻の最高指揮官に抜擢された。松井はまたその後、南京を侵攻し大虐殺を犯した日本軍の最高指揮官であり、南京大虐殺の張本人である。1948年11月、極東国際軍事裁判は、松井に「彼は自分の軍隊を統制し、南京の不幸な市民を保護する義務を持ち、その権限をも持っていた。この義務の履行を怠っていたことについて、彼は犯罪的責任があると認めなければならない。（中略）絞首刑に処する」という判決が言い渡された。1948年12月零時、松井はA級戦犯として東京で処刑された。1978年、右翼勢力の働き掛けによって、松井石根は他のA級戦犯とともにその位牌は靖国神社に祀られるようになった。



松井石根

中国軍の南京防衛

導入

1937年11月20日、国民政府は遷都声明を発した。「長期抗戦を可能にするためため、時局を総合的に考慮し、戦況に適応して本日首都を重慶へ移す。今後、広い地域でさらなる持久戦が展開されるであろう。中国は人口が多いし、国土も広い。人々は決死の覚悟をもって、国土に熱血を流す。いかなる暴力もそれを阻止することができない。国外においては国際社会の支持があり、国内において民衆が団結している。抗戦を続けていけば、国家と民族の独立を守る目的が必ず達成できる。」

南京防衛戦の前夜

第2次上海事変が勃発してから、首都南京は日本軍による空襲の主要目標となった。

1937年8月15日、20機の日本海軍航空隊の攻撃機は日本の大村基地から出発し、初めて太平洋を越えて南京を空襲した。大校場飛行場と明故宮飛行場に爆弾を投下した他、人口密集の八府塘、大行宮、中山東路一帯に対しても空襲と掃射を行った。その後、日本の攻撃機は絶えることなく南

京とその周辺地区で空襲を続けた。9月中旬、日本軍は南京への空襲の規模を拡大し、南京の政治、軍事、交通施設及びラジオステーション、工場、商店、病院、学校、家屋に爆弾を相次いで投下した。



空襲された中央大学

空襲以来、最大規模の攻撃は9月25日に行われたものである。その日、日本の攻撃機は、午前9時から午後4時半にかけて、5回

にもわたる空襲を行い、百機に近い飛行機を出動させた。南京城内では警報が絶えまなく鳴り続けた。『申報』の報道によれば、「我が文化、衛生、慈善などの機関の多くは破壊され、破壊された商店及び家屋住宅が少なくない。百人以上の平民が、日本軍の暴行によって命を失った」。

8月15日から12月13日までの4ヶ月間、日本軍の攻撃機は空襲を続け、南京に莫大な災難をもたらした。圧倒的な戦力差のもとで、中国の空軍と南京守衛防空部隊は、敢然として日本軍に反撃し、日本側の傲慢さを挫き、中国軍民の士気を大いに鼓舞した。



中国軍に撃墜された日本軍の飛行機残骸

西進し続けた日本軍を前に控え、中国政府は、淞沪守備軍撤退を指揮すると同時に、重慶に遷都し、戦争を持久化する方針を明確した。一方で、首都南京の防衛問題も日程に挙げた。南京の防衛方策を確定するため、中国政府軍事委員会委員長蒋介石は、数回にわたって高級幕僚会議を開いた。高級将校のなかで、蒋介石の考えに近かったのは唐生智である。

中国政府軍委員会執行部主任の唐生智は、「南京はわが国の首都で、国際的にも注目されており、孫文総理の陵墓の所在地でもある。もしも南京を放棄すれば、総理の霊が浮かばれないだろう」と語った。

蒋介石は1937年11月26日の日記でこう記した。「南京城を守り切ることはできないが、守らないわけにはいかない。そうしないと、上に対しても、下に対しても、国に対しても、民に対しても、申し訳が立たない」。彼は「南京の防衛は、守るか守らないかの問題ではなく、いつまで守るかという時間の問題である。敵軍の圧倒的火力優位のもとで、しかも揚子江は制圧されているという状況のもとで、守り抜くのを期待するのは非常に難しく、短時間の防衛策しか取れない」。

1937年11月20日、中国政府は重慶遷都を宣言した。11月24日、唐生智は正式に南京守備軍司令官に任命され、13の師団および15の旅団を率いて南京の防衛に当たった。唐生智は「南京と心中しよう」と誓い、揚子江封鎖線の警戒、渡船の撤去を命令し、城を守る決心を示した。

郊外の激戦

1937年12月6日以降、句容、湖熟、淳化、秣陵関、湯山、棲霞山、牛首山などの東から西にかけての外圍陣地では、中国守備軍と南京を攻める日本軍とは激しい交戦を繰り返した。巨大な死傷の代価を払った後、日本軍は南京外圍の陣地を相次いで占領した。

12月8日夜、司令部は守備軍が「兵力を城壁周辺に集中し南京を守る」という目的のため、南京城壁を防壁とする陣地まで撤退するように命令した。12月9日昼頃、日本軍の飛行機は南京城内へ「勸降書」を撒き散らし、中国守備軍に最後通牒を出したが、断然と拒否された。

もっとも激しい戦いは光華門で行われたものである。当時、光華門に駐留したのは国民革命軍陸軍第9集團軍第87師団第259旅団である。旅団長の易安華は、黄埔軍校第3期卒業生である。出征前、彼は妻子を江西宜春の実家に送り、分かれた時、「われの扶助金を待って、それで子供を養ってくれ」という『告妻子書』を書いた。

1937年12月9日、日本軍は連続3回光華門を攻めたが、全て易安華の率いた259旅団の将士の勇敢な抵抗に撃退された。



城壁の上で抵抗する中国守備軍



光華門を攻撃する日本軍

10日午後、光華門両側の城壁は日本軍の砲火によって二つの大きな穴が開けられ、日本軍伊藤善光大隊約150人は光華門に突入した。易安華は259旅団将兵とともに8時間の激戦を経て光華門に突入した日本軍を城門の穴に閉じ込め、日本軍大隊長伊藤善光を射殺し、光華門の陣地を堅守した。最後、易安華は銃弾に当たり壮烈に戦死した。

12月10日午後、松井石根は南京総攻撃の命令を下した。日本軍による南京への爆撃と砲撃のなかで、南京城壁は主要な攻撃目標となった。日本軍の猛烈な砲火のもとで、南京城壁は大きく破壊された。中山門城壁は多くの穴を開けられ、光華門は廃墟となり、中華門城楼も焼失した。他には、通済門、雨花門、水西門なども大きな破壊を被った。その後、双方は南京城の東、南、西郊で激しい戦を繰り広げ、南京城外の紫金山、雨花台など、また通済門、光華門、水西門などの地においても、双方は激しく戦った。

紫金山は孫文の陵墓の所在地で、南京東部の自然防壁でもある。「蒋介石の鉄衛隊」と呼ばれていた近衛兵はここに駐留した。1937年12月8日から12日に至って、中国守備軍はずっと紫金山陣地に駐留し、日本軍と激しく戦っていた。双方の損失も大きかった。後に、松井石根でさえ「南京の近衛兵は相当に勇猛な抵抗をしてきた」と認めざるをえなかった。紫金山の山頂部戦闘に参加した日本軍第9師団は、後に戦史でこう書いた。「紫金山に駐留した部隊はわれわれの猛攻にもかかわらず、実に勇猛で、最後の1人まで戦っていた。死ぬに決まっていると知りながらも、抵抗を続け、我が軍隊の進攻を阻止しようとした。」12日の夕方、中国守備軍は命令に従い撤回し、紫金山は日本軍に占領された。

粘り強い抵抗にも関わらず、中国軍は装備優位の日本軍の圧倒的侵攻を防御することはできなかった。12月12日夜、日本軍は多方面から中国守備軍の最後の防衛線を突破した。

南京陥落

1937年12月13日、日本軍は南京城南部の中華門、雨花門、東部の中山門、北部の太平門、東南部の光華門、通済門、武定門及び西部の水西門、漢西門（現在漢中門付近）などの城門を占領し、南京城内に突入した。ここに至って、南京は占領されてしまった。

長期的抗戦と必要な作戦兵力を温存するため、蒋介石は12月11日に3回にわたって南京守備軍に撤退の命令を下した。しかし、指揮上の過ちで、守備軍の撤退は無秩序で、数多くの守備軍は揚子江の川岸に残され、川を渡ることができなかった。統計によると、南京の守備軍は10万人余りであり、そのうち1万人以上が戦死した。包囲を突破した少数の部隊を除いては、殆どの官兵は南京に取り残された。

日本軍は南京を占領した後、1937年12月17日、松井石根率いる中支方面軍と海軍によって「南京入城式」が行われた。



日本軍の「入城式」

さまざまな原因により、南京防衛戦は失敗に終わったが、中国軍民はこの戦いにおいて、屈せずに抵抗し続けようとする勇敢な姿勢を示し、中華民族の不動の精神的支えとなった。統計によれば、中国守備軍は南京防衛戦で将軍10人余り、旅団長以上の指揮官50人余りを失った。彼らは中国の戦場で犠牲になったあらゆる英霊とともに永遠に中国人の尊敬と銘記に値する。

史実にリンク

雨花台での血戦

1937年12月12日、日本軍は飛行機と重火器でもって、数千人の歩兵を出動させ、3つの進路に分けて中国守備軍が駐在する雨花台陣地に猛烈な進攻を開始した。中国側の軍事資料『陸軍第88京沪抗戦紀要』にはその日の戦況が記されている。「敵は戦車、飛行機、大砲及び精鋭部隊でもって絶えず猛攻撃を仕掛けてきた。我が262旅団長の朱赤、264旅団長の高致嵩、韓憲元、李傑、華品章、趙寒星、黄琪、符儀廷、周鴻、蘇天俊、王宏烈、李強華が各部隊を率いて死にもの狂いに抵抗したが、そこは血に染められた。

午前中、韓憲元、黄琪、周鴻相、符儀廷が次いで殉難し、午後になって朱赤、高致嵩、華品章、蘇天俊、王宏烈、李強華も武器と食糧が尽きたため自殺したり戦死したりして、その悲惨さを見るに耐えかねた。全師団官兵6千余人はみな壮烈に殉国し、527団の李団長も包囲を突破して飛行場まで突撃したところ、敵の反撃を受け負傷したため、自決を選んだ。

三 南京大虐殺

内外を震撼させた大虐殺

導入

1937年12月28日、上海租界の中国語新聞にはロンドンの『タイムズ』から転載された記事『南京の運命』が載っていた。「城内の道には、無辜の住民の死体があふれている。揚子江に近い城門の入り口では、死体が1メートルほどの高さまで積まれていた。乗用車とトラックは死体の上を走っている。日本軍は中国人兵士と警察を捕まえては1か所に集め、その場で銃殺した。」

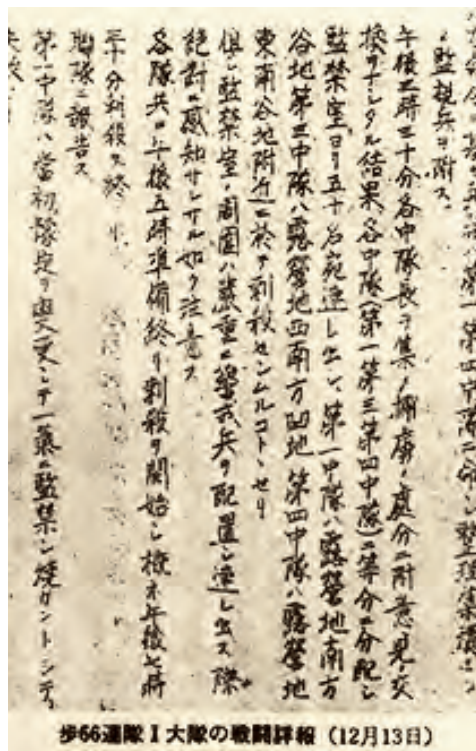
集団虐殺

南京を攻める前に、日本軍はすでに南京城の周辺で残虐な集団虐殺を行った。

日本戦車部隊兵中山重夫が虐殺を目の当たりにした。「南京城に入る前の2日間、郊外にある雨花台で目にした光景が忘れられない。日本軍兵士は、白旗を掲げた中国人を堀沿いに座らせ、彼らを銃剣で次々に刺し殺した。刺されて跪いている人がいても、それを軍靴で堀に蹴り落とし、土で埋めてしまったのだ。この老弱を問わない虐殺は4時間にも及んだ」

1937年12月13日、日本軍は中華門、雨花門、光華門、中山門、太平門、水西門などの城門から南京城に侵入した。日本海軍は揚子江を遡って北上し、下関の沿岸を支配下に置いた。国崎支隊と山田支隊はそれぞれ浦口と烏龍山にある砲台を攻めた。日本軍は国際公約を守らず、中国人捕虜を全員殺害する方針をとり、武器を所持していない中国人兵士と民衆を対象に大規模な虐殺を犯した。

12月13日の朝、太平門を陥れた日本軍は約1300人の中国人戦争捕虜を太平門の壕で虐殺した。



日本軍の『戦闘詳報』に捕虜殺害指示の内容が記されている

日本軍第16師団歩兵第33連隊第2大隊兵士池端正巳はこう振り返った。「敗残兵たちが太平門に来て、武器解除された。捕虜の人数が多いし、戦利品も多い。負傷兵と民衆をどう扱ったらいいかは問題になる。われわれ兵士は百人だけであるが、彼らは千何百人もいる。彼らに食べ物を提供することは不可能である。我らは自分自身が食べることさえ難しい。だから、師団に彼らをどう扱うのかを尋ねると、上司から全て処刑せよと命じられた」。

南京城の東、南、西の城門を陥れた後、徹底的に「残敵を肅清する」ため、日本軍は相次いで所属する各「掃蕩区」と国際安全区の町々を「掃蕩」し始め、武装解除された中国人兵士と、兵士と疑われる中国人平民を大規模で逮捕し、殺害した。

日本軍第16師団歩兵第20連隊上等兵増田六助は手帳でこう記した。「数万人の残兵は昨日まで抵抗してきたが、四方から包囲された後、1人も逃げず、全て難民区へ避難していた。今日、亡くなった戦友の仇を討つため、われわれは草むらを分けてでも彼らを探し出す！われわれは小隊に分かれ、家から家へと彼らを根ほり葉堀り探した。明け方になって、6百名余りの残兵を玄武湖の畔に連れて行って銃殺した。」

日本軍は中国人の兵士と、兵士と疑われる平民を逮捕した後、近くで集団虐殺を行うだけではなく、さらに彼らを郊外に連れていきそこで集団虐殺を行った。

生存者伍長徳は南京城陥落時は国際安全区の交通警察官で、12月15日に日本軍に捕まえられた。彼はこう



下関ふ頭での焼かれた死体、後ろは日本軍の馬車

回想した。「朝8時頃、いきなり何人かの日本兵士が来て、銃剣で青年男子を脅かし、全て外へ連れ出して路上に集合させた。首都映画館の前を通りかかった時、隊伍の後ろから何台かのトラックが日本兵と機関銃を運んで来た。午後1時、漢中門に到着し、我ら2千人余りを城門内で下車させ、座らせた。そして、2人の日本兵は縄の両端をそれぞれ持って、群衆の中から100人を囲んだ。彼らは多くの日本兵に漢中門外に連行され銃殺された。」

下関は南京の交通の要衝であり、中国軍隊撤退と難民避難の重要な通路である。下関を中心とする南京北部の揚子江沿岸は日本軍による虐殺の最も集中した場所である。12月13日午後、日本軍は迂回し下関入りしたが、多数の中国人士官と兵士、それから一般市民は揚子江を渡る船を見つけれなかったために川岸に残された。そこで、日本軍は直ちに装甲車、機関銃などの武器で猛烈な射撃をし、数多くの中国人



日本軍は武装解除された中国軍捕虜を虐殺するため
幕府山一带に集めている

官民と兵士はふ頭、川岸、川中で殺された。その後、日本軍は市内の「掃蕩」で逮捕した中国人兵士と、兵士と疑われる平民を揚子江川辺の三叉河口、中山ふ頭、石炭港、草靴峡、燕子磯などの地に連れて行って集団虐殺を行った。

日本人従軍記者鈴木二郎が下関で行われた虐殺の光景を次のように記した。「ここでの虐殺は極めて残虐である。日本軍に追い込まれて逃げ道がなくなった兵士と平民は、機関銃によって射殺され、血が川のように流れ、屍体は山の如く積んであり、幅広い揚子江の黄色い水面も赤く染められてしまった。水面には数えきれないほどの屍体が漂っている。倉庫が密集した地域では、虐殺を犯している日本軍の姿があちこちに見られる。ここはすでに死の町になってしまった。」

幕府山の草靴峡における虐殺に加わった日本軍第13師団歩兵第60連隊第4中隊少尉宮本省吾は『陣中日記』でこう記した。「12月16日、兵たちは特別な作戦を取ることに決め、約3000名の捕虜を揚子江川岸に連れて行って殺害した。これは戦場だけで見られる風景である。12月17日、今日、兵隊は南京入城の式を行った。殆どの兵士は捕虜の処刑

に加わった。夕方いったん宿営地にもどるやいなや、またすぐに捕虜の処刑に出るような有様だった。すでに2万人以上の捕虜を殺したため、兵士らにとって、人殺しは一種の癖のようになった」。

無差別虐殺

南京陥落時、ほとんどの平民は国際安全区へ避難したが、一部の市民は相変わらず安全区外の自宅にとどまっていた。日本軍は武器解除された中国人兵士と、兵士と疑われる平民に対して大規模な虐殺を犯したと同時に、南京の町々、住宅、寺院、村落などに対して繰り返し掃蕩し、無差別に一般の平民を殺害した。



生存者夏淑琴氏

生存者夏淑琴一家の遭遇は、無差別虐殺の典型的な事例である。彼女の回想によると、12月13日午前、約30人の日本兵が中華門東新路5号にある彼女の家の扉を叩いた。大家の哈さんは門を開けたとたん銃殺された。彼女の父親は日本軍に殺さないでくれと頼んだが、それでも銃殺された。日本軍は母親から僅か1歳の妹を奪って地上に落とし殺した後、母親の服を脱がせて輪姦し、その後銃剣で刺し殺した。隣の部屋で、祖父と祖母は一生懸命二人の姉を守ったが殺害され、二人の姉も輪姦され銃剣で刺し殺された。

南京国際安全区委員会委員であるアメリカ人の牧師ジョン・マギーも妻への手紙にこう書いた。「日本兵は手当たり次第に捕虜を殺しただけでなく、年齢を問わず一般の平民を虐殺した。野原でウサギを殺すかのように、多くの平民は街で日本兵に無差別に殺された。城南から下関に至るまで屍体だらけである。」

安全区及び城の内外では、無紀律な日本軍官兵は「掃蕩」という名目の下で強姦、略奪、虐殺などの悪行を犯し、こうした無差別な虐殺はあちこちに見られた。



中華門前に横たわっている死体

南京市民孫宝慶が1945年11月5日南京市政府に提出した文章にはこう記されている。
「急に事態が変わり、南京は危急の状態に陥った。両親は兄の孫宝学と親族男女などを漢中路難民区に暫く避難させ、自分たちは家の留守番をした。日本軍は入城し、人道に反して暴行を犯し、60代の父親を軍刀で殺した。『災いは重なるものだ』とよく言われるが、兄は軍事訓練を受けたことがあるため、難民区に入っていった日本軍に兄嫁とともに銃殺された。」

屈せぬ抗争

日本軍による残虐な暴行のため、南京城は恐怖と悲鳴に満ちていたが、南京市民はさまざまな方法で抵抗し続けていた。梁志成のような市民は勇敢に日本軍と戦い、蹂躪に甘んじない精神を示した。李秀英など侮辱された民衆は死に至っても屈することがなく、このため、多くの民衆は命を失った。南京を占領した日本軍は、民衆を彼らと協力したり奉仕したりするように脅かしたが、南京民衆の多くは不協力の態度を取り、抵抗し続けた。

『新華日報』1951年3月3日の報道によると、1937年12月17日の早朝、運転士梁志成は自宅で捕まえられ、銃殺用の機関銃弾を満載したトラックを下関向け運転させられた。運転室で彼は死の危険を感じてでも、監視の日本人軍官を殴って首をきつく絞めたところ、同乗していた日本兵士に発見された。梁は車から降りてきた日本兵に軍刀で刺され、また軍官に撃たれ血まみれになって倒れた。午後になってようやく蘇り、血を雪道に垂らしながら自宅に這って戻ってきた。翌日の朝、もう持たないと感じた梁は姉に、「生きていこう。人々に伝えよう。僕は日本人に殺された。死んでも彼らに協力しない」と歯を噛んで伝えたという。

白蕪は『今日の南京』でこう記した。ある日、中国人は日本軍に「歓迎皇軍」という文字入りの旗を持たされ、大行宮の前で南京に侵入した日本軍を「謹んで歓迎する」ことを強制させられた。群衆の中からある年配者が立ち上がり、腕を挙げて真面目な顔で「平和！奮闘！中国を救おう！」と高い声で呼んだ。その年配者は直ちに殺害されたが、中華民族の固い抵抗意志を反映している。

この残虐極まりない虐殺は1938年1月末まで続き、6週間にも及んだ。南京大虐殺は日本軍が中国で犯した無数の犯行の中で最も残酷で最も典型的な事例である。

史実にリンク

日本軍が各地で起こした主な虐殺事件（部分）

番号	虐殺事件	年月日	場所	犠牲者人数
1	羅徑虐殺	1937年 8 月	上海宝山県	1万人余り
2	保定虐殺	1937年9月15日	河北省保定	2千人余り
3	寧武虐殺	1937年10月	山西省武県	4.8千人余り
4	成安虐殺	1937年10月24日	河北省成安	5.3千人余り
5	金山守虐殺	1937年11月5日	浙江省杭州湾	2.9千人余り
6	吉安虐殺	1938年1月21日	浙江省吉安	2.8千人余り
7	鳳陽虐殺	1938年5月2日	安徽省鳳陽	5千人余り
8	漢王虐殺	1938年5月20日	江蘇省徐州	2人余り
9	駐馬店爆撃	1938年5月20日	河南省駐馬店	1.5千人余り
10	広州爆撃	1938年5～6月	広東省広州	9千人余り
11	晋城爆撃	1938年7月20日	山西省晋城	5千人余り
12	武漢爆撃	1938年8月～10月	湖北省武漢	3千人余り
13	衡陽爆撃	1939年4月6日	湖南省常德	9千人余り
14	宝鷄爆撃	1939年7月	陝西省宝鷄	2千人余り
15	沁県虐殺	1940年12月	山西省沁県	5千人余り
16	重慶トンネル虐殺	1941年6月5日	重慶	9千人余り
17	常德毒ガス虐殺	1941年12月24日 1943年11月26日	湖南省常德	2千人余り
18	淮南炭鉱 「万人坑」	1943年3月	安徽省淮南	1.3万人余り
19	大同炭鉱 「万人坑」	1937年9月 ～1945年8月	山西省大同	6千人余り
20	済南新華院 (捕虜収容所)	1943年 3 月 ～1945年 8 月	山東省済南	1.5万人余り

大規模な女性暴行

導入

1937年12月15日、日本軍が入城してからの3日目、9歳の楊明貞とその両親は自宅に隠れたが、父は日本軍に刺し殺され、彼女と母は日本軍に強姦された。「その後、母は大きなショックを受け、精神病にかかり、終日泣いているうちに失明し、やがて亡くなった。両親が亡くなった後、私は身寄りがなくなって孤児になり、あちこちへ物乞いに回った。その後、焼き餅、揚げパンなどを売ったりするような小売商で生計を立ててきた。日本軍は私たちを蹂躪し、私の人生を狂わせた。小便失禁という生理面だけでなく、心理面においても深く傷つけられた。」

日本軍の強姦暴行

日本軍は南京の軍民を虐殺したと同時に、乱暴にも中国人の婦人を強姦した。日本軍の性的暴行は羞恥心もなければ、限度もなく、年齢、身分を問わず、妊婦、病婦にまで手を染め、その暴虐さは人類歴史上極めて稀である。

郭沫若は1938年6月の『日寇暴行を世界友邦軍人に伝える書』では、「わが軍隊が撤退した各地区では、強姦は日本軍にとって日常茶飯事になっていた。一般婦人はもちろんのこと、老婦幼女も侮辱を免れない。輪姦によって死亡したり、拒絶したため殺害されたりした者は多数いる。その残忍さは紳士が公に口に出



日本軍に38日も監禁され、金陵大学病院で診察を受ける18歳の女の子

すこともできないことを、日本軍は平気で行う。まったく恥知らずだ。」

日本軍の強姦暴行は偶発的な現象ではなく、軍官による黙認のもとで、南京を占領した日本軍全体の集団的犯罪である。南京は陥落後、数万人の日本軍が城内に乱入し、1週間以内で8000名以上の中国人婦人を強姦した。

日本軍第16師団歩兵第33連隊第2大隊兵士三木本一平の回顧によれば、「南京において当てもなくふらふらしているうち女の子を強姦した。部隊の兵士達は外へ出て勝手に女を徴発したことは、軍官も知っているが、何も言わないで黙認していたと見てもいい。女狩りは分隊を単位としてあるいは何人かがグループを組んで行なっていた。」

日本軍の強姦から逃げるため、恐怖におののく婦人たちはみな安全区にある婦人児童収容の難民所である金陵女子文理学院に逃げて保護を求めたが、城内をぶらぶらしていた日本軍もこれを聞いてやってきた。彼らは毎日何回も乱入してきて、西洋人の阻止を振り切って、その場で強姦を犯したり多くの婦人を捕まえて他所に連れ出して犯したりした。また、夜になって壁を飛び越えては婦人を強姦する日本兵もいた。



女性難民の避難場所となった金陵女子文理学院の教室

金陵女子文理学院アメリカ籍教師ミニ・ヴォートリンは12月19日の日記でこう記した。「今日もまた数多くの婦人と若い女の子がキャンパスに入ってきた。昨日もまた恐怖の夜である。多くの人は跪いて、入れてくれるように頼んだ。彼女たちを入れたが、彼女たちは今夜どこで泊れるのかは分からない。午前中、私はキャンパスの端から端まで走りまわり日本軍を追い払い、南山に3回も行った。そして、キャンパスの裏に回って、すぐにまた呼ばれて教工楼に行った。そこで、2人の日本兵は階段を上っているという。538号室の部屋では、日本兵1人が部屋の前に立って、もう1人が室内で

女の子を強姦しているのを見た。私が現れて日本大使館からもらった証書を見せて、はじめて彼らは慌てて逃げた。私は殴ってやろうと思った。もしも日本の婦人がこのようなことを知ったなら、どんなに恥ずかしい思いをするのだろうか。」



金陵女子文理学院に避難した難民

12月下旬、南京を占領した日本軍のほとんどが撤退し、第16師団の官兵は警備のためにと残り、依然として婦人を乱暴に強姦し続けた。1938年1月下旬、天谷部隊は、第16師団に代わって南京の警備に当たった以後も、強姦暴行が時々あった。

日本軍は南京大虐殺で中国人婦人に対して大規模の強姦、輪姦の暴行を犯した。そのようなことは中国人民に耐えがたい傷を残しただけでなく、日本にとっても恥ずべきことであった。アメリカの『ザ・ニューヨーク・タイムズ』は1937年12月19日の記事で、「南京事件は、栄光の記録として日本の戦史に記されるのではなく、日本全国民にとって永遠に後悔する1ページとして歴史に刻まれていく。」と報じた。



南京利濟巷にある旧日本軍慰安所跡地

日本軍による南京慰安所の設立

日本官兵が中国人婦人を対象に大規模の性的暴行を犯したことは、日本軍の残忍無恥を暴露している。1937年12月28日、日本軍上海派遣軍司令部は『南京慰安所の開設について』の案を承認した。南京慰安所の開設は、日本軍の中国各占領区で公然と展開した性奴隷制度の発端である。

日本軍政当局の配置と支持のもとで、様々な慰安所は南京の町々に建てられるようになった。南京は慰安所と「慰安婦」の最も多い地区の一つとなった。中国、朝鮮半島など国家と地域で多くの婦人は「慰安婦」になり、日本軍に蹂躪されてしまった。

日本軍による「慰安婦」問題は、人類文明史上稀な野蛮暴行、人類の尊厳に対する冒涇、人権に対する甚大な侵害である。数多くの慰安婦は心身ともに傷つけられていた。日本軍は長期にわたって、公然的、計画的、組織的に恫喝などの手段で数多くの各国の婦人を官兵の性奴隷にした。これは日本軍国主義の残虐、野蛮な側面を暴露している。

史実にリンク

南京における朝鮮の「慰安婦」——朴永心

朝鮮籍「慰安婦」朴永心は南京利済巷の日本軍慰安所で3年以上の「慰安婦」として過ごした。その後、日本軍とともに雲南松山へ移動し、「慰安婦」を強いられた。1944年、すでに妊娠した彼女は、他の「慰安婦」3人と日本軍の拘束から逃れ、中国軍に助けられ、収容所に保護された。収容所で1年間滞在した後、重慶、上海を経て1946年4月に朝鮮仁川に戻った。2003年11月、朴永心は中日友人の援助で南京を再訪し、かつて辱められたあの建物の前に来た。そこで彼女は利済巷慰安所での被害現場を指さし、当時日本軍から受けた暴行の事実を訴え、この慰安所の歴史的生き証人になった。



当時の写真に入っている自分を指差している元慰安婦朴永心

強奪、放火

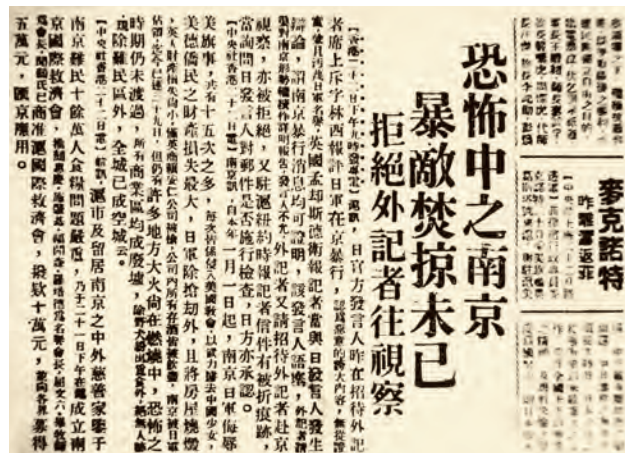
導入

戦犯に対する南京裁判の軍事法廷では、「陥落の直後、中華門沿いから下関の川岸までいたところで火災が発生し、炎は天を突く勢いで南京の半ばほとんど灰塵に帰してしまった。公有私有財産の損失は数字で計算できないほどである。」と指摘された。

強奪

日本軍は南京において、数週間にわたる虐殺、強姦のほか、恣意的強奪と放火も犯した。

日本軍兵士曾根一夫の回顧によれば、「南京攻略部隊と兵站部隊との距離がますます大きくなる。指揮官は、攻略部隊を休ませず、『食料を現地調達せよ』という命令を下した。調達とは聞こえがいいが、地元の食料を強奪せよと言っていると同じだ。以前にも強制調達が行われたが、命令が出される前にはみな罪悪感を持っていたが、命令が下された以上、軍人たちはあちこちで穀物、家畜を略奪して飢えをしのいでいた。」



南京における日本軍の暴行に関する1938年1月23日付『大公報』の記事

日本軍は南京を占領した後、南京城の隅々まで略奪を行った。彼らはトラック、人力車、自転車など手当たり次第あらゆるものを使って、官舎、会社、店舗、民家に押し入り、食料、服装、寝

具、現金、時計、絨毯と名画など価値あるものならなんでも奪い取り、そして略奪した現場に火を付け、犯罪の証拠を隠滅した。日本軍第16師団団長中島今朝吾は蒋介石の官邸をはじめ、各所で奪った物を32個の小包にし、東京に郵送した。中には、多くの骨董品と美術品が含まれていた。



略奪品を運ぶ日本兵

12月14日、南京安全区国際委員会主席ジョン・ラーベは車で南京市区を通った時、日本軍の小部隊による略奪を目の当たりにした。彼は日記でこう記した。「日本兵は10人ないし20人でグループを組んで城内を走り回って、商品を略奪した。この目で見たのだが、とても信じられなかった。彼らは店舗の窓を破って好きなだけ物を奪った。これは彼らが食べ物に事欠いているためであろう。中山路と太平路にある店舗はみなこういう光景である。一部の日本兵は、次から次へと略奪した物を搬送し、一部の兵士は人力車を徴用して略奪した物を安全な地域に運んでいく。」



日本軍に荒らされた漢中門一帯

ドイツ住民は1938年1月13日の『南京受難の日々』で次のように書いた。「獣に化した略奪者は、絶えず難民区と難民でいっぱいの家屋に押し入り、前の兵隊による略奪で取りそこねた物も残らず奪う。今日の南京城には、略奪されるのを免れた家屋はほとんどない。鍵のかかった扉とタンスは乱暴にこじ開けられ、中の物は奪われたり壊されたりされた。」

国際法によれば、戦争期間中、第三国の大使館・領事館は保護対象となるが、日本軍は官舎、工場、商店、学校、民家を略奪すると同時に、国際公約を破って南京滞在の外国人住民及び各国駐南京の大使館の財産をも略奪した。例えば、12月14日、日本軍は英国大使館に押し入り、略奪を行った。米国、ドイツ、フランス、イタリア、スペインなどの国の大使館でも略奪され、値打ちがあるものはみな奪われた。



日本軍に荒らされた金陵大学中国文化研究所

南京郊外の各地区も日本軍の略奪を受けた。農民の農具、種子、牛、ロバ、豚、鶏などみんな奪われた。日本軍による周辺農村地域における略奪行為は、農民に大きな損失を与えただけでなく、田畑を荒廃させ、翌年の作柄にも大きな影響を与えた。

日本軍は南京では、大量の図書、文物をも略奪した。戦後、南京市の実施した調査によれば、抗戦期間、全市の個人所有書籍の損失は15万冊、2800巻余りまた1800箱余りに達し、書画、骨董の損失は35800件にのぼる。日本軍は、南京の個人および機関所有の内外書籍及び骨董書画に対しても略奪し、中国の文化に多大な損失をもたらした。

放火

日本軍は略奪のあと、罪を隠すため、しばしば略奪現場を放火した。放火の対象は中国の軍政機関、商店、文化遺跡、民家などである。



太平路一帯の廃墟

12月13日午前、第10軍司令官柳川平助は秣陵で命令を下した。「あらゆる手段を尽くして敵軍を殲滅せよ。必要なら市区を焼失せよ。特に敗残兵の偽装行為に騙されてはいけない」。この命令が下された結果、日本軍は各地で放火をくりかえした。

日本の随軍記者小俣行男の回顧によれば、「入城した時、建物はまだたくさんあったが、翌日になると、放火によって、主な建物は悉く焼失されてしまった。兵士らは民家に押し入り、値打ちのある物を奪い取って、家屋に放火した。」

日本軍官の指揮のもとで、兵士は至るところで放火した。放火の範囲は、南の中華門から北の下関川岸に至るまであちこちに及び、大火が起きた。数多くの政府機関、商店、会社、学校、住宅地などの建物は、日本軍の放火によって、焦土と化した。

12月21日、ジョン・ラーベと南京滞在の西洋人たちは、日本駐南京大使館に行き、放火行為、集団破壊の停止を求めたが、効果が上がらず、略奪と放火の日々は依然として続いていた。

最も深刻な被害を被ったのは、南の商業区である。夫子廟、中華路、太平路、中山路などの主要道路沿いの建物はほとんど焼失されてしまった。南京占領以降、中央商場は日本軍に強奪され、上層は日本軍によって焼失され、1階は馬小屋として利用された。



燃え上がる南門大通りの一角



破壊された夫子廟の一角

鼓楼病院のアメリカ籍医師ロバート・O・ウィルソンは、12月19日付けの日記で太平路付近での日本軍の放火行為をこう記した。「今日もまた大火事に驚かされた。昨日、あちこちに火事があったが、今日になって夕飯の頃、太平路付近の幾つかの街には大火が燃えさかり、自宅から200ヤードしか離れていない家屋にも火が付けられた。」

1938年2月になってようやく、大虐殺が終息に向かい南京の秩序は徐々に安定を取り戻した。日本軍の南京占領後に犯した放火、殺人、強姦、略奪などの暴行は、南京城内外の隅々にまで起こったのである。この長くて恐ろしい6週間のうち、南京は「この世の地獄」となっていた。ラーベが言ったように、「この長く続く恐怖の日々は、想像を絶するものであった。」

史実にリンク

南京の被害状況に関する調査報告

金陵大学アメリカ籍教授ルイス・S・C・シマイスは、1938年春、南京市街地と郊外の状況について調べ、『南京における戦争被害調査』という報告をまとめた。報告によれば、南京の89%の家屋が破壊されたが、その内訳は、抗戦で壊されたのは2%、放火で壊されたのは約24%、略奪で破壊されたのは63%である。南京市民の被った損失の総額は4000万元で、なかでも商業財産の損失は1900万元、住宅財産の損失は2100万元である。全市各地の家屋その他の損失は合計24600万元に及ぶ（注：当時3.5元＝1ドル）

四、救援と暴露

人道的救援

導入

南京陥落前、20名余りの西洋人は危険を冒して南京に留まり、外国人という身分を利用して南京安全区国際委員会を設立し、南京安全区を設けた。彼らは難民を保護し、日本軍に対して抗議活動を展開し、そして日本軍の残虐行為を暴露することに多大な貢献をしていたのである。

南京安全区国際委員会

1937年11月12日、日本軍は上海を占領し、その後速やかに南京へ進攻した。当時、南京に滞在した外国人は、上海南市難民区の実例に倣って南京にも安全区を設けることを連名で提言した。米国長老教会宣教師W.プラマー・ミルズと金陵大学教授マイナー・シール・ベーツなどが積極的に連携し南京安全区国際委員会を設立した。12月2日、南京安全区国際委員会は本部を寧海路5号に移転させた。12月8日、日本軍が南京の近郊に迫り、当国際委員会は『南京市民に告げる書』を

公示し、市民安全区の正式な設立を宣言した。数多くの市民と難民は、安全区に避難した。



南京安全区国際委員会本部

このエリアには公共施設、例えば金陵大学、金陵女子文理学院、金陵神学院、鼓楼病院、華僑旅館などがある。これらの場所は、難民の収容に適していて、そして何より重要なのは、アメリカ、イタリア、日本、ドイツ等の外国大使館及び一部



ミニー・ヴォートリン（左端）と赤十字会炊き出し所に働く人

の西洋教会もここにあることである。戦争期間中、このエリアは南京でもっとも安全な地域であった。

南京安全区国際委員会は、人道主義的救援、難民の保護、日本軍の暴行に対する阻止・抗議では大きな役割を果たした。安全区所轄の25か所の難民収容所に避難した難民は7万人にも達し、その他は、安全区にある個人住宅あるいは校庭内も避難場所に使われた。安全区に避難した難民は、最も多い時、25万人にも達した。

ミニー・ヴォートリンは金陵女子文理学院の管理責任者で、最初、女性難民は2000名程度来ると予想していたが、実際は最も多い時、10000人余りにも達した。

南京に残った難民はほとんどほかの地域に避難できなかった貧困平民である。そのため、食糧救済は安全区国際委員会の最も重要な仕事の一つとなった。それ以外、当国際委員会は現金救済、現物救済と衛生防疫なども行った。



南京安全区国際委員会本部前で救援物資を受け取る難民

1937年12月から1938年2月にかけて、南京安全区国際委員会は、食糧を安全区にある25か所の収容所と5つの炊き出し所に配った。炊き出し場は安全区にいるすべての難民に食事を提供し、一部有料の物を除いてほとんど無料であった。

日本軍は南京を占領した後、「掃蕩」という名のもとで、安全区に押し入って敗残兵を搜索、逮捕したり、虐殺、強姦、略奪をくりかえしたりして、難民の生命と財産に大きな被害を与えた。難民を保護し、日本軍の暴行を阻止することは、国際委員会のもう一つの重要な仕事になった。

安全区以外の一部の場所にも、難民が集中していた。例えば、江南セメント工場、棲霞寺、和記洋行、葛塘、双塘長老教会などで、なかでも城内最大の難民所は江南セメント工場である。1937年末から1938年春にかけて、南京安全区国際委員会の援助のもと、ドイツ人のカル・キントルとデンマーク人のシンドボルグが江南セメント工場にいた時、合わせて約2万人の中国人難民を収容・保護した。

江南セメント工場難民所に収容された5、6歳の子どもは手榴弾の爆発で傷つけられ、シンドボルグによってバイクで市内に運ばれ、鼓楼病院の米国人医師ウィルソンの手当てを受けた。ウィルソンはすばやく手当てを施しただけでなく、シンドボルグに薬品、包帯をあげ、看護婦を二人遣わしてシンドボルグとともにセメント工場へ同行させた。



江南セメント工場に設置された難民所

南京安全区国際委員会のほかに、一部の慈善団体も難民の保護に当たっていた。例えば、国際赤十字会南京委員会、世界赤十字会南京分会、中国赤十字会南京分会などである。

南京安全区国際委員会の支援のもと、米国聖公会牧師マギーを始めとする外国人は、1937年12月13日に国際赤十字会南京委員会を結成した。

2ヶ月間、国際赤十字会は、安全区において米を配ったり、炊き出し所を運営したり、遭難者の死体を埋葬したりして、南京安全区国際委員会と緊密に連携した。

難民の恩人

南京大虐殺のなかで、南京に残った西洋人は正義感と人道主義精神により、個人の危険を冒して、全力を尽くして日本軍の暴行にさらされた難民を保護し、日本軍の暴行を暴露しようとした。救助された多くの南京難民は、彼らを「恩人」、「守護神」と呼び、称賛した。

ラーベは、1882年ドイツのハンブルクに生まれ、1931年から1938年にかけてドイツのシーメンス南京支社の責任者で、1937年11月南京安全区国際委員会的主席に選ばれた。彼は日本軍の殺人、放火、強姦、略奪などの暴行を何度も目撃し、日本大使館に抗議して、また数十万人の難民の救助に関わった。ラーベは600名余りの難民を自宅に保護し、庭に小屋を建てて「シーメンス難民収容所」を設け、日本軍による爆撃から避難民を守った。



ラーベ

『ラーベ日記』によれば、「1938年1月7日、リッグスさんは今日見てきたことを話してくれた。一人の婦人が狂乱して街を徘徊していたところ、病院に運ばれた。18人もいる家族の唯一の生存者で、他の17人の家族はすべて銃殺されたり刺殺されたりしたとのことであった。彼女の近所に住んでいる婦人は、両親と3人の子供を失ったが、いずれも日本軍に銃殺された。」



ヴォートリン

ヴォートリンは、アメリカイリノイ州生まれである。南京大虐殺の時、多くの婦人と子どもが金陵女子文理大学に避難し、日本軍に狙われたため、彼女は幾度も大学の正門で押し入ってくる日本軍を阻止していた。日本軍に脅迫された時も、「ここは君たちが来るところではない、私は決して離れない」と決然と拒み、軍刀で脅かされても決して屈することはなかった。

ヴォートリンは、1937年12月18日の日記でこう記した。「ここ数日間、毎日キャンパスの端から端まで走り回り、ここはアメリカの学校だと大声で叫んだ。ほとんどの日本兵は私の叫び声を聞いて立ち去ったが、中には、無視して軍刀を振り回

しながら私を睨んだ兵士もいる。」

南京大虐殺の時、金陵大学付属病院（現在の鼓楼病院）は当時南京城内において市民に開放された唯一の病院であり、当時南京安全区内の唯一の医療機構でもあった。当時、たくさんの難民は日本軍の暴行で刀傷、あるいは銃傷を負わされている。水や電気の供給が乏しいのにも関わらず、ウィルソンは病院唯一の外科医として、毎日たくさんの患者を昼夜を問わず診療しなければいけなかった。患者には、李秀英のような日本軍に撃たれ、刺され、強姦された中国人の被害者が多くいた。1938年6月初めになって、ウィルソンはようやく南京を離れた。

ウィルソンは1938年12月18日の日記でこう書いた。「今日は現在ダンテの煉獄の6日目で、血と猥褻の大文字で書かれている。多くの平民や婦人が殺され強姦された。これら獣のような暴虐、猥褻と野蛮な行為を阻止できるような人は一人もいない。（中略）2日前に起こったことを話そう。昨日、大学（金陵大学を指す）のある中国人教員の住宅が壊され、2人の親族は強姦された。（中略）日本兵は銃剣で男の子を殺害した。午前中、半時間でもう一人の8歳の男の子に縫合の手術をした。あの子は、5ヶ所刺され、1ヶ所は腹を貫通していたため、腸の一部がお腹から出ていたが、救かるだろうと思った。」

史実にリンク

ジャキノと南市難民区

1937年の第2次上海事変では、日中両国は百万人に近い部隊を上海に派遣し、激戦となった。民衆はみな租界に逃げた。しかし、租界では収容しきれず、すべての道路を封鎖した。難民は租界の周辺、特に南市に避難するほかに仕方がなかった。

10月2日、中国赤十字会上海国際委員会が正式に発足した。10月4日、難民救済委員会はフランス人牧師ジャキノ（中国名は饒家駒）を主席として1つの委員会を結成した。彼らは難民区の設立に着手した。

11月2日、ジャキノは上海市長俞鴻鈞に、南市にエリアを設けて難民を収容するように提言し、許可された。ジャキノは直ちに日本軍と日本の外交官に対して、中国側が南市難民区の開設を許可し、難民だけを入らせると説明し

た。日本総領事館と日本軍の高級将校は協議の上、許可してくれた。11月4日になって、上海市政府は、南市難民区の開設を批准した。

11月8日、上海国際救済委員会は、看板を掲げた。南市難民区は11月9日午後5時に正式に開設され、南に方浜路を境界とし、北に民国路（現在の人民路）を境界とした。開設したその日、城隍廟、豫園およびその他の学校、教会に収容所が建てられた。難民区は1940年6月まで続いており、30万人上の中国人難民を保護した。

上海南市難民区は、難民救済のモデルとなり、ラーベらが国際安全区を開設したのもこれを参考にしたのである。南京国際安全区の開設は、ラーベがジャキノを通して日本方と連絡を取って実現されたので、饒家駒は南京国際安全区の開設の事実上の推進者であった。

博愛、慈善、奉仕の精神に満ちたジャキノは20世紀における典型的な人道主義者であり、「難民の父」「中国の友」と呼ばれている。彼の責任感あふれる行動は南京、漢口、広州およびフランス、ドイツにも波及し、『ジュネーブ第4公約』締結の原動力になった。それによって、戦時平民の保護は各国の共通認識となった。

南京安全区国際委員会メンバー

氏名	国籍	所属
ラーベ (John H.D.Rabe)	ドイツ	シーメンス
フィッチ (George A. Fitch)	アメリカ	基督教青年会
スマイス (Lewis S.C.Smythe)	アメリカ	金陵大学
マギー (John G.Magee)	アメリカ	米国聖公会
ハンセン (J.M.Hanson)	イギリス	アジア石油
シールズ (P.R.Shields)	イギリス	和記洋行
マンロフォーレ (P.H.Munro-Faure)	デンマーク	テキサコ石油
パンティン (G.Schultze-Pantin)	ドイツ	興明貿易
マッケイ (Ivor Mackey)	イギリス	スワイヤー・グループ
ピッカリング (J.V.Pickering)	アメリカ	モービル石油

スperlリング(Eduard Sperling)	ドイツ	上海保険
ベイツ (M.S.Bates)	アメリカ	金陵大学
ミルズ(W.P.Mills)	アメリカ	長老会
リーン(D.J.Lean)	イギリス	アジア石油
トリマー (C.S.Trimmer)	アメリカ	鼓楼病院
リッグス (Charles.H.Riggs)	アメリカ	金陵大学
クレーガー(Christian Kroeger)	ドイツ	礼和洋行

国際赤十字会南京委員会メンバー

主席	マギー (John G・Magee)
副主席	李春南 (中国語名)、ラウエ (W・lowe)
秘書	フォスター(Ernest H・Forster)
経理	クレーガー(Christian Kroeger)
委員	トウィーネム女史(Paul Dewitt Twinem)
	ヴォートリン女史(Minnie Vautrin)
	ウィルソン(Robert O・Wilson)
	マンロフォーレ(P.H・Munro-Faure)
	トリマー (C.S・Trimmer)
	マッガルン(James Mccallun)
	ベイツ (M.S・Bates)
	ラーベ (John H.D・Rabe)
	スマイス (Lewis S.C・Smythe)
	ミルズ(W.P・Mills)
	ポドシヴォーロフ(Cola Podshivoloff)

日本軍の暴行を暴露

導入

日本軍は、南京大虐殺と同時に、情報の封鎖も行い、南京と外部とのあらゆる無線連絡を切断し、西洋の新聞記者と外国人をはじめ、あらゆる人々の南京城への出入りを厳しく制限した。しかし、南京に残った西洋人と一部の新聞記者は、古都南京で災難に遭遇しただけでなく、様々な形で日本軍の南京における暴行の真相を記録し暴露した。

西洋メディアの報道

1937年12月13日南京が占領された後、南京城には5人の西洋人記者が残った。彼らは日本軍の南京を占領した後に犯した大虐殺などの暴行を目撃し暴露した最初のジャーナリストであった。これらの西洋人記者は、『シカゴ・ディリーニュース』記者のスティール、『ニューヨーク・タイムズ』記者のダディーン、AP通信社記者のマイク・ダニエル、『パラマウント・ニュース』カメラマンのメンケン、ルーター社記者のスミスである。

1937年12月15日16日、彼らは南京を強制退去させられた。南京大虐殺の新聞記事を最初に出したのは『シカゴ・ディリーニュース』記者のスティールである。米国軍艦で上海に向かう途中、自ら目撃した事実を日本軍による南京大虐殺暴行の新聞記事『日本軍が万人以上を殺害』と書き、軍艦上の無線電信を通してアメリカに送り、12月15日付けの『シカゴ・ディリーニュース』に掲載した。これは南京大虐殺に関する最初の記事であり、詳細にわたって日本軍の暴行を暴露したのである。南京を離れた他のアメリカ、イギリスの記者も日本軍による南京大虐殺を速やかに報道した。これらの報道は、あっという間に世界中に伝えられていった。

スティールと同じ軍艦に乗って上海に向かった『ニューヨーク・タイムズ』の記者ダディーンは自らの取材、12月18日付けの新聞に『捕虜全員殺害』と題する記事を掲載した。記事では、「上海に赴く前に、10分間続く虐殺で200人が揚子江岸辺で処刑されているのを、記者は目撃した。彼らは、城壁を後ろにして一列に並んで銃殺された。その後、

日本兵は無慈悲にも死体を蹴り、まだ死に切れていない者をも撃ち殺した。」『ニューヨーク・タイムズ』の発行部数が多かったため、ダディーンの報道はあっという間に世界に知られ大きな反響を呼んだ。

英国ガーディアン社の記者のハロルド・J・ティンパーリは南京安全区国際委員会の公式文書、報告および委員たちの手紙、日記に基づいて、1938年3月に『戦争とは何か—中国における日本の暴虐—』という本を書き上げ、世界に向けて南京大虐殺の真実を初めて詳細に明らかにした。この本は中国語にも訳され、『外国人が目撃した日本軍の暴行』と題して、1938年7月に出版され、郭沫若はその序言を書いた。



ティンパーリ（右端）と中国政府外交顧問ドナルド（左から2番目）が1941年、ハワイにて

この本の中国語版は、抗日戦争の時、国民政府の中央宣伝部国際宣伝課から出版され、初版の6万冊のうちの45000冊を前線の将兵に送り、中国軍民の士気を大いに高揚させた。この本は日本語にも翻訳され、日本、上海、香港、海外の各地に出版された。

西洋人による暴露

南京に留まった西洋人は、自らの目で見たことに基づいて数多くの日記、手紙などの文字材料を残しただけでなく、写真、映像なども撮って、詳細に日本軍の暴行および南京市民の被った苦難を記した。彼らはまた様々な方法でこれらの材料を親友に送り、日本軍の暴行を暴露しようとした。

米国人宣教師フィッチはその日記（1937年12月10日～1938年1月下旬）でこう書いた。「12月19日、日曜日。1日に5から10回も押し入られた住宅がある。貧しい平民でも略奪され、婦人は強姦された。なんの理由もなく処刑された者もある。ある7人の中国人布教ボランティアのうち6人も殺害され、生き残った1人は逃げ出した。彼は負傷したにもかかわらず経緯を私のところに伝えに来てくれた。」1938年、フィッチはアメリカに戻り、自分の目撃した日本軍の暴行をもとにして、米国の大手雑誌に投稿して、日本軍の暴行を暴露した。

米国人宣教師ファウストは1937年12月19日の妻にあてた手紙にこう書いた。「こんな獣のような心の持ち主がいるとは想像もつかない。しかし奴らと付き合わなければならない。日本兵は欧米人に自分の暴行を目撃されたくないから、私たちのことを嫌っている。しかし、私たちは断固としてここに留まった。15日16日、彼らは敗残兵を捜し、武器を持っているかないかに関わらず、人々を大量に逮捕し、ほとんど虐殺した。2、3百人をある池に連行し、一人ずつ射撃して池に落としたという。また、もう別の敗残兵は暗い小屋へ押し込まれ、周りに機関銃で見張られ、生きたまま焼死させられた。」

1937年12月14日から、ベーツによって書かれた抗議書及び日本軍の暴行記録に、南京安全区国際委員会は委員のラーベ、ベーツ、スマイスたちは署名して、ラーベとスマイスが南京安全区国際委員会の名義で日本大使館に届け出た。ほかに、ヴォートリン、ウィルソン、フィッチ、スマイスは数回にわたって日本大使館に足を運んで、それぞれの所在地における日本兵の暴行について抗議し、日本側に措置を講じるよう要求した。1938年、イギリス、ドイツ、アメリカなどの駐南京大使館の官員は相次いで南京に戻ってきた。南京に滞在した西洋人はまた度々大使館に報告した。ベーツはアメリカ大使館に何回も日本軍の暴行事例を報告した。これらの事例は直ちに電報で米国国務省に送られた。

ベーツの抗議書によれば、「（1937年12月15日）我らの新しい図書館に1500人の難民を収容し、そのうち4人の婦人はキャンパスで強姦された。3人は連行されたきりで2度と戻らなかったが、1人が連行されたが日本大使館の近くで日本憲兵によって釈放された。こういう暴行は難民区そのほかのエリアにも百件位ある。」と記されている。

1937年11月から、マギーは国際赤十字会南京委員会的主席、南京安全区国際委員会委員に選ばれた。彼は危険を冒して16ミリビデオで南京大虐殺の様子を撮っていた。フィルムは後に南京安全区国際委員会総幹事フィッチによって上海に持ち出され、コダック社に頼んで4セットのコピー

を作らせた。フィッチは映像資料をアメリカに持ち帰って各地で放映し、アメリカ国会下院外交委員会、戦時情報局、記者などにも放映し、南京大虐殺の状況を紹介し、日本軍による暴行の真相を暴露した。そのほか、彼はニューヨーク、シカゴなどで日本軍の南京における暴行について講演を行った。

マギーが撮影した第1～12号映像は、日本軍が南京を占領した1937年12月13日から1938年5月に至るまでのもので、半年間にも及ぶ。撮影の場所は上海路、下関、難民区などを含む。映像には日本軍による南京の爆撃および日本軍による虐殺（銃殺、刀殺）、強姦、放火など言語道断な暴行が写っていた。撮影された人物には、後に広く知られるようになった李秀英、夏淑琴、伍長徳などの生存者が含まれる。これら貴重な歴史資料は日本軍暴行の動かぬ証拠になっている。



マギーの撮影したフィルム

THESE ATROCITIES EXPLAIN JAP DEFEAT

These ten pictures are not pretty to look at, but they partially explain why Japan is now being beaten at war. They were taken after the Japanese occupation of Nanking, Dec. 13. The photographer was an American missionary whose name must be concealed. He used a 16-mm. amateur movie camera carefully hidden from Japanese eyes.

The most dreadful pictures of the rape of Nanking this amateur photographer could not take. He knew that if he filmed civilians being shot down or houses looted and burned, he would be arrested and his camera smashed. Besides, he was too busy, like other foreign missionaries and doctors, saving what civilians he could. But for two weeks he saw an army completely out of control, raping, burning, killing, robbing and destroying without check. He saw a Japanese embassy completely powerless to restrain its own men. In foreign hospitals in and around Nanking he saw hundreds of innocent victims of "totalitarian war."

But the rape of Nanking had, for the Japanese, its own devastating revenge. It 1) solidified China into an indomitable will to resist the invader; 2) so demoralized Japanese military discipline that they are now, to the world's amazement, enduring one smashing defeat after another on the 1,000-mile Shantung front.



In primitive baskets, Chinese civilians who were shot, bayoneted or bludgeoned by Japanese soldiers are transported by neighbors to an emergency village opened by missionaries.



Horrible death wiped out all but two of a Chinese family of 11 when 30 Japanese soldiers broke into the house, Dec. 13.



A bullet wound in the arm remains with this woman as memento of night when a soldier killed her husband and child.



His head burned to a cinder, this man died in a few hours. He was one of 100 tied together, doused with gasoline.



Two bayonet gashes in the throat were punishment for this home owner who refused to yield his women to Japanese.



Decapitation was barely escaped by this woman when soldiers ordered her to an abandoned house, hacked her neck.



A beating with an iron bar was given this 14-year-old boy who begged to go home when taken prisoner and starved.



Struck with an axe, this policeman was still in hospital two months later. He escaped a firing squad by feigning death.



For resisting assault, this 19-year-old woman was stabbed 29 times. She had a miscarriage in a refugee hospital later.



Typical fate met by thousands in Nanking: execution with hands tied in back, bodies left to rot in roadside ponds.

マギーのフィルムから現像した写真は数百枚あり、そのうちの10枚は1938年5月16日に出版したアメリカの雑誌『ライフ』に掲載され、日本軍の起こした南京大虐殺を暴露する動かぬ証拠となった。

『シカゴ・ディリーニュース』の『捕虜全員殺害』
に関する新聞記事（抜粋）

「地獄の4日間」は南京が占領された経緯を形容するに最もふさわしい表現である。

私は他の外国人とともに米国軍艦に乗ったばかりである。私たちは南京攻略戦が始まってから南京を離れた最初の外国人である。南京を離れる際、最後に目撃したのは、300人の中国人が揚子江の近くの城壁の前で順番に銃殺されいる光景であった。死体は人の膝の高さまで無残にも積み上げられていた。

南京陥落の時、城内に取り残された敗残兵は言い尽くせない恐怖に陥れられた。また、入城してきた日本軍によって多くの人は命を奪われたが、犠牲者には何の罪もない平民たちが多く含まれていた。



1937年12月15日付の『シカゴ・ディリーニュース』

五 歴史的裁判

東京裁判

導入

日本軍の南京での暴行について、『極東国際軍事裁判判決文』の中で次のように書いてある。「強姦、放火および殺人は、南京が攻略されてから少なくとも6週間、そして松井と武藤の入城から少なくとも4週間にわたって、引き続き大規模に行われたのである。」

1941年12月、太平洋戦争が勃発した。戦局の推移に伴い、連合国が戦後戦犯の処置について協議を重ねた。1943年10月、英国の提案により、戦時中の戦争犯罪の証拠を調査・記録し、戦後の戦犯に対する告訴と審判に備える「連合国戦争犯罪委員会」がロンドンに設立された。1945年7月26日に発表された『ポツダム宣言』において、「われわれは、日本人を民族として奴隷化するつもりもなければ、国民として絶滅させる意図もない。しかし、われわれの捕虜を虐待したものを含めて、すべての戦争犯罪人に対しては断固たる正義に基づき、処罰を加えるのである」と日本の戦犯を処罰する立場を表明した。連合国の合意により、戦後、A級戦犯は国際軍事裁判にかけられるが、B級とC級戦犯は犯罪行為が行われた所在国の軍事裁判にかけられ、国際法および当事国の国内法に従って裁かれることになっていた。

1945年8月15日、日本は無条件降伏した。9月2日、日本政府代表が降伏文書に調印して正式に戦犯処罰の条項を含む「ポツダム宣言」を受託したが、やがて連合国の各国は戦犯を裁く軍事法廷を設置し、日本人戦犯を裁く準備を整えた。

1946年1月19日、中国、ソ連、アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、フィリピンの連合国11か国が代表を派遣し、東京において日本人A級戦犯を裁く極東軍事裁判所を設立した。



極東国際軍事法廷内

極東国際軍事裁判所

1946年1月19日、連合国総司令官マッカーサーが特別声明を発表し、極東軍事裁判所の設置を宣言した。そして、当日審理の基本的原則と手続きを決める「極東軍事裁判所憲章」を發布した。極東軍事裁判所は連合国11か国の推薦した裁判官を判事に任命し、オーストラリアの裁判官ウェップが裁判長を務めた。また、国際検事団も設置され、アメリカ人のキーナンが首席、各国から推薦された裁判官が副検事を務めた。



中国人裁判官梅汝璈（前列右二）と極東国際軍事裁判の裁判官たち

極東軍事裁判は（「東京裁判」と略称）は1946年4月29日に起訴を開始し、5月3日に審理を始めたが、1948年11月12日判決の言い渡しがついて終了し、全部で2年半の歳月を要した。28名のA級戦犯が平和に対する罪、人道に対する罪を犯したとして起訴された。極東軍事裁判はおびただしい揺るぎない犯罪事実を証拠とし、818回にわたって法廷を開き、419名の証人が法廷で証言を行い、779名の証人が証言文書を提出した。受理した証拠は4336件、英文の法廷審理記録は48412ページ、判決書は1231ページにも及び、日本人A級戦犯に対して正義の判決を下した。

南京大虐殺の単独審理

南京大虐殺の真相を解明するため、極東軍事裁判は南京大虐殺を単独審理した。法廷は検察側の提出した南京大虐殺関連の証言、物証を審理し、約3週間かかって南京大虐殺を経験した13名の中国人と外国人の証言を求め、100件以上の証言文書を受理した。南京大虐殺の審理は1か月以上続いた。戦犯の弁護士も質疑と弁護を行った。

南京大虐殺は旧日本軍が中国侵略戦争中犯した典型的な事件なので、国際検事団は数回にわたって中国に証拠集めに来て、大量の人証と物証を把握した。中国政府と南京市臨時参議会も国際検事団に大量な証拠材料を提供した。

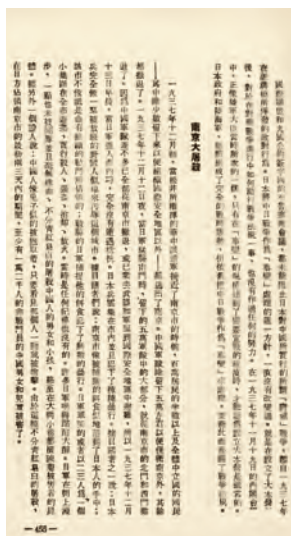
それから、国際検事団は日本、アメリカ、ドイツなどの国での公文書から旧日本軍の南京大虐殺暴行の証拠を探すことを特に重視した。それらの証拠は、法廷における南京大虐殺の事実認定および松井石根に対する罪を確定する重要な証拠となった。極東軍事裁判における旧日本軍の暴行に対する事実認定の証拠は確実で充分であった。

検察側は、松井石根を南京大虐殺の主犯と認定した。審理にあたって、松井石根の弁護士が無罪弁護を行い、12か条の宣誓証言を捏造し、旧日本軍が南京で犯した罪を逃れようとした。カナダ人のノーラン副検事が松井石根の虚言に対して反論した。

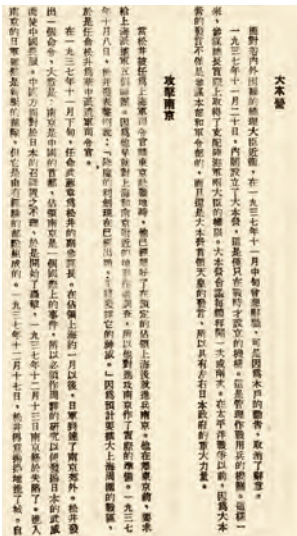
法廷の判決

日本が第2次世界大戦中において犯した罪に対する判決文のなか、南京大虐殺は重要な位置を占め、第5章第5節において「南京攻撃」の経過を明らかにし、第8章では「南京暴虐事件」の2つの部分で、日本軍が南京において殺人、放火、強姦、略奪を犯したことを認定した。

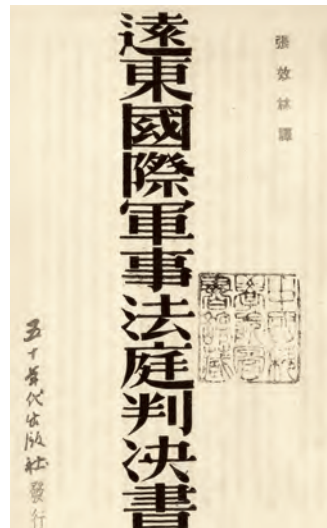
極東国際軍事法廷が28名のA級戦犯を審理し、最終的に25名のA級戦犯に有罪判決を言い渡した。そのうち、東条英機、板垣征四郎、松井石根などの7名は絞首刑に処された。絞首刑は1948年12月22日夜から23日の未明にかけて実行された。



判決文「南京暴虐事件」の部分



判決文「南京攻撃」の部分



極東国際軍事裁判判決文の中国語訳

史実にリンク

『極東国際軍事裁判判決文』（抜粋）

目撃者の一人によると、日本兵は同市を荒らし汚すために、まるで野蛮人の一団のように放たれたのであった。目撃者たちによって、同市は捕らえられた獲物のように日本人の手中に帰したことが、同市は単に組織的な戦闘で占領されただけではなく、戦いに勝った日本軍は、その獲物に飛びかかって、際限のない暴行を起こしたことが語られた。（中略）これらの無差別殺人によって、日本側が市を占領した最初の2、3日間に、少なくとも1万2千人の非戦闘員である中国人男女子供が死亡した。（中略）

後日の見積もりによれば、日本軍が占領してから最初の6週間、南京とその周辺で殺害された一般人と捕虜の総数は、20万以上であったことが示されている。これらの見積もりが誇張ではないことは、埋葬体とその他の団体が埋葬した死骸が、15万5千に及んだ事実によって証明されている。これらの団体はまた死体の大多数がうしろ手に縛られていたことを報じている。これらの数字は、日本軍によって死体を焼き捨てられたり、揚子江に投げ込まれたり、またはその他の方法で処分されたりした人々を計算に入れていないのである。

南京裁判

導入

1947年2月6日から、中国南京軍事法廷が日本軍第6師団長・谷寿夫などの日本戦犯に対して公開審理を行った。80名以上の証人が相次いで法廷で、谷寿夫などが南京で犯した罪を証言した。3月10日、南京軍事法廷が谷寿夫に対して死刑を言い渡した。4月26日、谷寿夫が銃殺刑に処された。

南京軍事法廷

1945年12月6日、中国政府は日本人戦犯を裁く「戦争犯罪処理委員会」を設立した。戦争犯罪処理委員会の規定により、中国は日本軍の降伏を受諾する際に、数千名の日本人戦犯を逮捕した。1945年12月中旬から、中国陸軍総司令部が相次いで南京、上海、北平、漢口、広州、瀋陽、徐州、済南、太原、台北といった10の重要な降伏受諾地に戦犯を裁く軍事法廷を設立し、日本人のB級、C級戦犯を裁くことになった。



中山東路307番にある南京軍事法廷跡地

南京軍事法廷が1946年2月15日に設立され、正式名称は「中国陸軍総司令部戦犯裁判軍事法廷」となっており、のちに国防部の所管となって、「国防部戦犯裁判軍事法廷」に名称変更した。石美瑜が裁判長を務めた。

統計によれば、南京軍事法廷は設立から1947年末まで、合わせて日本人戦犯を102名審理し、そのうち死刑は6名、無期懲役は10名、その他有罪判決は12名であった。

谷寿夫などの戦犯を裁く

南京軍事法廷は主に日本に駐在する中国代表团によって引き渡された戦犯、および中国各地の軍事法廷から移送された大物の日本人戦犯を裁いたが、なかでも、南京大虐殺にかかわる戦犯の審理が最も影響のあるものであった。

谷寿夫は旧日本軍第6師団長で、部隊を率いて南京を攻略して大虐殺を実施した。第2次世界大戦が終わってから、戦争犯罪処理委員会は直ちに谷寿夫を重要な戦犯として認定した。1946年2月、谷寿夫は南京大虐殺の主犯として中国に引き渡された。南京軍事法廷は数回にわたって谷寿夫に対して尋問を行ったが、彼は大虐殺の罪を極力否定した。12月31日、南京軍事法廷は平和に対する罪と人道に対する罪で谷寿夫を正式に起訴した。



処刑場へ押送される谷寿夫

南京軍事法廷は、大量な証拠調査を行った。証人だけで500人以上にのぼり、さらに報告書、調査票、統計表、書籍、写真、映像資料などのものが含まれている。裁判長石美瑜は、関係者を率いて普徳寺をはじめとする5か所の南京大虐殺被害者の埋葬地を訪ねて検視を行い、証拠を集めた。

1947年2月6日から8日にかけて、南京軍事法廷は勵志社大講堂（今の中山東路307番にある鐘山ホテルの敷地内にある）において谷寿夫に対して3日間の公開審理を行った。法廷は金陵大学社会学教授スマイス、歴史学教授ベイツと被告人小笠原清などをはじめとする証人を80人喚問し、検察側と弁護側は激しく争っていた。やがて、2月25日、3月3日に公開審理が行われ、判決が言い渡された。判決文の中には、次のような内容がある。「調査によれば虐殺が最もひどかった時期はこの1937年12月12日から同月の21日までであり、それはまた谷寿夫部隊の南京駐留の期間内である。中華門外の花神廟・宝塔橋・石観音・下関の草靴峡などの箇所を合計すると、捕えられた中国の軍人・民間人で日本軍に機関銃で集団射殺され遺体を焼却、証拠を隠滅されたものは、単燿亭など19万人余りに達する。このほか個別の虐殺で、遺体を慈善団体が埋葬したものが15万體余りある。被害者総数は30万人以上に達する。死体が大地をおおいつくし、悲惨きわまらないものであった。」

南京裁判の谷寿夫に対する審理が4か月にわたって行われ、提出された証拠は数千件にのぼった。谷寿夫に対する死刑判決は、十分な証拠に裏付けられている。1947年4月26日昼、谷寿夫が南京雨花台に押送され処決された。

戦犯向井明、野田毅（のちに野田岩に改名）が相談して、南京攻略の途中、「百人斬り競争」を行った。戦犯田中軍吉は軍刀で捕虜や非戦闘員を3千人を切り殺した。1947年、3人が南京に引き渡され裁判を受けた。十分な証拠や審理のうえ、南京軍事法廷は1947年12月18日に、「百人斬り競争」を行った向井明、野田毅、そして捕虜・非戦闘員を多数殺害した田中軍吉に対して公開審理を行い、当日午後に死刑判決を言い渡した。1948年1月28日、3人は雨花台に押送され処決された。



1947年12月18日、公開審理中の向井敏と野田岩、田中軍吉

1945年8月15日、日本は無条件降伏した。連合国による降伏受諾の地域区分にしたがい、東北地域を除く中国大陆、台湾地区、および仏印の北緯16度以北地域の日本軍は、中国戦区の最高統帥に降伏することになっていた。（中国東北三省はソ連軍に降伏）。中国陸軍総司令官何応欽が降伏受諾の総責任者に任命され、中国戦区における日本降伏に対する受諾と接收を担当した。8月21日、日本側代表である支那派遣軍参謀総長今井武夫などが中国陸軍総司令部の所在地である湖南省芷江（しこう）に飛び、中国陸軍参謀総長蕭毅肅などと降伏受諾の実施手続きについて協議した。その後、中国陸軍総司令部が降伏受諾の日程を決め、全国に16か所の降伏受諾の区域を設置し、そして降伏受諾の責任者および場所を指定した。

1945年9月9日午前9時、中国戦場の降伏受諾式が南京にある陸軍総司令部の元中央士官学校の講堂で行われた。支那派遣軍総司令官岡村寧次と中国の陸軍総司令官何応欽が降伏受諾書に署名した。そして、何応欽が日本軍降伏と善後処理に関する命令第一号を岡村寧次に手渡した。以降、中国戦場の16の降伏区域では、南京の降伏受諾式にならってそれぞれ降伏受諾式が行われ、日本軍は武装解除された。それと同時に、中国の抗日根拠地や海軍、空軍も日本軍の降伏を受諾した。1945年8月から1946年2月までの半年余りの間、128万人余りの日本軍が相次いで降伏し、日本軍の陸海空軍の武器装備や中国各地の傀儡政権の官舎、企業、物資が接收された。

付録 中国戦場各地の降伏受諾の責任者、降伏受諾の区域、および接收の場所

降伏受諾の責任者	降伏受諾区域	接收の場所
第一方面軍司令官 盧漢	ベトナム北緯16度以北の地区	ハノイ
第二方面軍司令官 張發奎	広州、香港、雷州半島、海南島	広州
第三方面軍司令官 湯恩伯	南京、上海	南京、上海
第四方面軍司令官 王耀武	長沙、衡陽、岳陽	長沙
第七戦区司令官 余漢謀	曲江、潮汕	汕頭
第九戦区司令官 薛岳	南昌、九江	南昌
第三戦区司令官 顧祝同	嘉興、杭州、金華、アモイ	杭州

第六戦区司令官 孫蔚如	武漢、沙市、宜昌	漢口
第十戦区司令官 李品仙	徐州、蚌埠、安慶、海州	徐州
第十一戦区司令官 孫連仲	天津、石家庄、北平、保定	北平
第十一戦区副司令官 李延年	青島、德州、済南	済南
第一戦区司令官 胡宗南	洛陽、新郷、鄭州	鄭州
第二戦区司令官 閻錫山	山西省	太原
第十二戦区司令官 傅作義	察哈爾、綏遠、熱河の三省	歸綏
第五戦区司令官 劉峙	鄭州、開封、新郷、南陽、 襄陽、樊城	鄧城
台湾行政長官公署長官 陳儀	台湾および澎湖列島	台北

史実にリンク

南京大虐殺の実態に対する調査

極東国際軍事裁判と南京軍事裁判における日本戦犯に対する審理に備えて、1946年6月23日、南京臨時参議会が南京大虐殺の実態を調査する専門委員会を設立し、日本軍が南京で行った暴行について調査した。委員会設立後、告示が全南京市民に発せられ、「民国二十六年（1937年）、南京陥落の際、敵軍が我が市民に対して大規模な殺戮を行いました。現在、我々は証拠集めをして極東軍事法廷に提供し、殺戮を行った者を南京に引き渡してもらって裁きます。ぜひご協力ください。」その告示の発布により、南京大虐殺の実態解明に乗り出した。専門委員会が設立された1946年6月23日から調査作業が南京市参議会に引き継がれた1946年11月11日まで4か月あまり続き、日本軍が南京で行った暴行を2784件集めた。この調査は極東国際軍事裁判における日本人戦犯に対する審理を支援してだけでなく、南京軍事法廷における谷寿夫などの日本人戦犯に対する審理に有力な証拠を提供した。

六 記憶と国家追悼

歴史的記憶

導入

南京大虐殺の犠牲者を追悼するため、1994年から江蘇省および南京市各界の関係者が毎年追悼活動を展開し、南京市政府の規定により毎年12月13日の10時に市の全域にサイレンを鳴らすことになっている。

1937年12月13日、日本軍は南京を陥れてから、6週間もの長きにわたって中国人に対して殺戮、強姦、略奪を行い、内外を震撼させるいわゆる南京大虐殺を引き起こした。それは、人類文明史における非人道的なファシズムの暴行の一つである。

歴史を歪曲する日本の右翼

日本の右翼勢力は、侵略戦争の歴史を極力否認するだけでなく、かえってそれを美化している。たとえば、日本の発動した太平洋戦争を西洋の植民地支配からアジアを解放する正義の戦争だと主張し、「東京裁判史観」が自虐的だと批判している。そして、日本の右翼勢力がいわゆる「自由主義史観」「大東亜戦争史観」を唱え、南京大虐殺の信ぴょう性を否定し、南京大虐殺は極東軍事裁判の時に「ねつ造」されたもの、あるいは中国人によって意図的に「虚構」されたものというのだ。

1980年代以来、日本の右翼勢力が学術研究の看板をかけて著作を相次いで刊行し、恣に歴史を歪曲している。代表的なものには、『南京虐殺の虚構—松井大将の日記をめぐる』(田中正明、1984年)、『「南京虐殺」の徹底検証』(東中野修道、1998年)、『「南京大虐殺」のまぼろし』(鈴木明、2006年)などがある。高校の歴史教科書には、日本軍が第2次世界大戦中に「慰安婦」を強制的に徴用したという内容が削除されている。

2001年、『新しい歴史教科書』が日本文部科学省の検定に合格し、中国、韓国をはじめとする戦争被害国から抗議を受けた。日本政府は中国、韓国から指摘された問題点を教

科書の「解釈」「表現」上の問題とみなし、「あながち間違っているとは言えない」という態度を取っているので、歴史問題における日本政府の公式見解は、侵略の歴史を美化する右翼の歴史観とはあまり変わらないと言えよう。それは日本政府の受諾したポツダム宣言に反するものだけではなく、村山富市元首相をはじめとする歴代の日本首相の表明した歴史認識とも異なっている。

南京での平和記念事業

日本の右翼の企みを暴き、南京大虐殺の犠牲者を追悼するため、1985年、南京市政府は1937年12月当時の大虐殺の現場であった江東門に記念館を建設した。開館以来、国内外の政府要人および一般市民が見学に訪れ、いろいろな形で犠牲者に哀悼の意を捧げた。その後、南京市は相次いで発見された大虐殺跡地に大虐殺犠牲者記念碑を建てた。それと同時に、多くの学者は大虐殺史の研究に取り組み、『南京大虐殺史料』『南京大虐殺档案』『南京大虐殺史稿』『南京大虐殺資料集』『南京大虐殺研究文献シリーズ叢書』『南京大虐殺全史』などの研究著作と資料集を相次いで刊行してきた。



南京大虐殺記念館新館

大虐殺の跡地に建てられた記念館が1985年8月15日に開館して以来、1994年と2005年に2度の拡張工事が行われた。大虐殺70周年に当たる2007年の12月17日に新館が開館した。新館は南京市水西門大通りに面し、敷地面積は7.4万平米、建築面積は1.2万平米に及ぶ。記念館は展示集会エリア、遺跡追悼エリア、平和記念公園エリア、図書資料エリアに分かれ、大虐殺跡地に建てられた歴史博物館形の記念館である。

記念館を鳥瞰すると、「平和の船」の形に見え、建物は「銃剣を鋤に変える」ことをイメージしている。建物のデザインには深い意味が込められ、外観は厳かで落ち着いてい

る。建物の前の部分は大虐殺の悲惨さを表現し、後ろの部分は平和の尊さを訴えている。建物全体は「歴史と平和」というテーマにまとめている。記念館の展示品は、いずれも貴重な資料価値のあるもので、また施設も一流のものである。敷地内にある著名な彫刻家呉為山の創作した彫刻作品が見学者から高く評価され、「世界の歴史記憶見学スポットベスト10」の1つと称され、「国家一級博物館」「国の重要文化財」の指定を受けている。そして、2014年9月、「国家級抗日戦争記念施設遺跡」に登録された。

真相を語る人々

1967年、日本人新島良友氏が南京訪問から帰国した後、南京大虐殺に関する文章を数編発表した。その後、早稲田大学の洞富雄教授は編著『近代戦史の謎』の中で多くの紙幅を割いて南京大虐殺の状況を記述した。1971年6月から、朝日新聞社の本多勝一氏が南京を訪れ、旧日本軍の暴行について被害者を直接取材し、多くの資料、資料写真を集めた。帰国後、彼は『中国の旅』を朝日新聞に連載し、中には南京大虐殺に関する記述が多くあった。その後、朝日文庫から単行本が刊行され、多くの人に読まれ、増刷を重ね、10年間で26刷となった。南京大虐殺の真相を語る日本人学者は、日本国内では「大虐殺派」あるいは「南京大虐殺肯定派」と称されている。1984年、「南京事件調査研究会」が結成され、南京大虐殺の調査、研究が展開され、南京大虐殺研究の基本資料となる洞富雄編『南京事件』『日中戦争南京大残虐事件資料集』が相次いで刊行された。これらの研究によって、歴史の真相が多くの日本人に知られるようになってきた。

旧日本軍の軍医であった山口誠太郎氏は1939年に南京に来ていた。漢方医の家に生まれた山口氏はその前、1912年に南京に来たことがあるが、今度、目の当たりにした南京は廃墟と化していた。彼は南京市の東側の紫金山のあちこちに咲いている彩雲のような美しい紫色のオオアラセイトウに見惚れ、その種を日本に持ち帰り、自宅の庭に植えた。名前が思い出せなかったので、「紫金草」と名付けた。それから20数年後、彼は戦争に対する反省や平和に対する祈念を込め、汽車に乗って車窓から紫金草の種をまき、日本全国に紫金草が開花することを期待していた。特に1985年、筑波で開催された国際科学技術博覧会の際に、山口氏親子と多くのボランティアが全世界から見学に訪れた人たちに100万個の紫金草の種子を配った。1996年、「ピース・フラワー」である紫金草を里帰りさせるため、「日中平和のガーデンづくりの会」を結成した。小学校教師であった大門高子氏は紫金草の話を聞いて深く感動し、それをテーマにした絵本を創作した。それから、作曲家と協力し、1998年に合唱曲『紫金草物語』を創作し、合唱団まで結成した。1999年、紫金草合唱団が東京で公演し、大きな反響を呼んだ。それ以来、合唱団のメンバーが増え



2009年4月18日、紫金草少女銅像除幕式

続け、日本における著名な民間平和団体となった。

中国系アメリカ人の故アイリス・チャン（張純如）氏は、3年間をかけて南京をはじめ世界各地で南京大虐殺の生存者にインタビューし、また関係文献史料を詳細に調べ、それを元に『ザ・レイプ・オブ南京―第2次世界大戦の忘れられたホロコースト―』を著わし、1997年アメリカで出版した。刊行してから、アメリカで大きな反響を呼び、数年間で十数回増刷し、発行部数が百万部近くとなった。彼女は努力と勇気でもって、人類史上悲惨極まりない南京大虐殺の歴史を書き記した。ハーバード大学の歴史学教授ウィリアム・C・カービ氏が「序文」に次のように指摘している。「（日本軍の）南京における暴行は、西側ではほとんど人々に忘れられている。だから、この本の出版の意義がとても大きい。」アイリス・チャン氏は、第2次世界大戦中にヨーロッパとアジアに起きていた大虐殺を関連付けて論じていた。



2001年12月13日、南京大虐殺記念館の主催でアメリカのサンフランシスコの教会で「永遠に忘れない―南京大虐殺資料展―」が開催され、平和祈願も行われた。左は展示会現場、右は平和祈願式典。

史実にリンク

【市民からの手紙】悲惨な歴史を南京の地に刻む

南京市五台山16号に住む団体職員であった汪梅氏は、1982年8月付けの手紙に、こう書いている。「今年は南京大虐殺45周年に当たります。『過去を忘れないのは、未来の鑑とするためである』とよく言われますが、南京大虐殺の30万人の犠牲者を追悼するため、またその真相を後世に伝えるため、南京市政府に『南京大虐殺犠牲者記念碑』を建てることを提案したい。そうすることで、悲惨な歴史を永遠に南京の地に刻むことができますし、中日両国の国民は、歴史の教訓をしっかり汲み取ることができ、力を合わせて復活しようとする軍国主義と戦い、中日両国民の世代間の友好にも有益です。」

国家追悼

導入

2014年12月13日午前10時、初めての国家追悼が南京大虐殺記念館において行われ、習近平国家主席が重要な演説をした。

国家追悼日とは、国家が重大な民族的災難および事件による死者を追悼するために制定する祭日のことである。第2次世界大戦後、主な参戦国は相次いで国家追悼日を制定し、国家の名で戦争中に犠牲になった国民を追悼し、国家が受けた戦争被害の歴史を銘記し、平和を大切にする気持ちを培う。



国家追悼サイト

国際慣例

外国では、ポーランド、ドイツ、イギリス、イタリアが1月27日を国家追悼日と定め、第2次世界大戦中にナチスのホロコーストの犠牲になった人々を追悼する。ロシアをはじめとする国々はドイツの降伏日を対独戦勝記念日と決め、戦争中犠牲になった人々を追悼し、反ファシズム戦争の勝利を祝う。2005年、第60回国連総会において、1月27日を「国際ホロコースト記念日」とする決議が採択された。このように、国家追悼日を制定することは、国際慣例に適っている。

国民の要望

南京市民は、大虐殺の地に住む市民として、国家追悼日の制定をかねてから強く要望していた。2005年3月3日、複数の政治協商会議の委員が次のようなことを提案した。すなわち、12月13日を国家追悼日として制定し、その日に南京大虐殺の跡地において追悼式を行い、内外の要人と社会各界の関係者、および外国人に参加してもらう。そうすることを通して、大虐殺の風化を防ぎ、被害の歴史に対する国民の認識を深めさせる。

この提案はただちに社会各界に大きな反響を呼び、ネットで話題となっていた。国家追悼日の制定は、国民の強く要望したことである。

歴史銘記

1937年12月13日から40日の長きにわたって、日本軍は南京で中国人に対し残虐極まりない大虐殺を行い、死者が30万人に達し、内外を震撼させた。南京大虐殺国家追悼日を制定し、国家の名で南京大虐殺犠牲者、および中国に対する日本の侵略戦争期間中、日本軍に殺戮された人々を追悼するのは、この歴史的事実を再確認し、中国国民は日本の侵略戦争によって大きな災難がもたらされたことを銘記し、世界平和を守る固い意志を表明するためである。

平和祈願

習近平国家主席が南京大虐殺国家追悼式典での演説の中で次のように述べている。「われわれが南京大虐殺犠牲者のために追悼式を行うのは、すべての善良な人々の平和へのあこがれと平和を守る気持ちを呼び起こすためであって、恨みを続けるためではない。中日両国人民は代々友好を持続し、歴史を鑑とし未来に向かい、共に人類の平和に貢献すべきである。」



国家追悼の鼎

式典の際、習近平主席が高さ1.65m、重さ2014kgの円形鼎の除幕を行った。77名の中学生が『平和宣言』を朗読し、人類平和に対する強い願望を表明した。



国家追悼の現場

史実にリンク

【ポーランド】アウシュビッツ強制収容所解放記念日

2005年1月27日、アウシュビッツ強制収容所解放60周年の記念行事に、当時のドイツ首相シュレッダー氏をはじめとする44か国の要人および強制収容所の生存者、数千人が参加し、毎年1月27日に集会を開き、アウシュビッツ強制収容所の解放を祝う。

【ドイツ】ホロコースト記念日

1995年、ドイツでは、1月27日をホロコースト記念日制定の法律が採択された。2014年、ドイツ総統府、総理府、各省庁および所属の政府機関が半旗を掲げ、ドイツ連邦議会はナチスの行ったホロコーストの犠牲者を追悼する集会を開き、ドイツのヨアヒム・ガウク大統領、アンゲラ・メルケル首相が出席した。

【シンガポール】全面防衛の日

1967年2月15日、シンガポールは「日本占領期犠牲者記念碑」を立て、その日を「全面防衛の日」と定め、旧日本軍占領期に犠牲になった人々を追悼し、シンガポールの若い世代に日本占領期の悲惨な歴史を銘記させ、自由と平和の尊さおよび全面防衛の意義に対する理解を深めさせる。

【アメリカ】真珠湾事件記念日

オバマ大統領は12月7日を「真珠湾事件記念日」にすることを宣言し、アメリカの受けた屈辱を銘記し、犠牲になった将兵を追悼する。

【ロシア】対独戦勝記念日

旧ソ連はドイツが降伏した翌日の5月9日を偉大な対独戦勝記念日と定め、反ファシズム戦争の偉大な勝利を祝う。その日は、ロシアの法定祝日で、毎年モスクワで大規模な集会と閱兵式が行われ、政府要人が赤の広場に行き、犠牲になった無名将兵たちに花輪をささげ、哀悼の意を表わす。

『平和宣言』

『平和宣言』は詩人馮亦同が『詩経』風に創作したものである。全篇の重要なポイントは、「大道のいけるや、天下を公と為す。大道は生と言ひ、和気が祥を致す」。前の句は『礼記』から引いたもので、中国人は古くから大同の世界、世界の平和を渴望することを表明している。「大道は生と言ひ」は『周易』から引用したもので、天地の間に最も偉大な道は生命を大切にすることであるという儒教の教えを伝え、南京大虐殺犠牲者を追悼する式典において、もっともふさわしい平和に対する願望を表明している。「和気が祥を致す」は作者自身の言葉で、「和を以て貴しと為す」を強調し、平和が人々に祥瑞と幸福をもたらし、平和の尊さに訴えている。

国家追悼の鼎

国家追悼の鼎は、100字の銘文が魏碑書体の簡体字で刻まれている。銘文は南京大虐殺が中国人に与えた大きな災難について記述し、中国人の憤りや強い非難の意思を表現し、犠牲になった人々に対する哀悼の意を表している。そして、南京大虐殺は、全中国の日本に対する抵抗により、中国人は最終的に勝利を獲得したプロセスを記述している。銘文は歴史の銘記、未来への警鐘、平和の維持、中華民族復興の夢の実現などへの強い願望を表明している。銘文は駢文体で書かれ、対句や押韻という形式にこだわり、深い意味が込められ、行文に勢いがあり、国家追悼鼎と混然一体となり、歴史の悠久さと文化の深さを現わしている。鼎は国家追悼の雰囲気づくりに役立っている。

